

# 菅城遺跡

SUGESHIRO ISEKI

中山間地域総合整備事業

(袖ノ木地区圃場整備) 予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書



1996年3月

島根県

羽須美村教育委員会

# 菅城遺跡

SUGESHIRO ISEKI

中山間地域総合整備事業

(袖ノ木地区圃場整備) 予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書



1996年3月

島根県

羽須美村教育委員会

## 序

羽須美村には平成4年3月現在、83の周知の遺跡が存在し、その6割以上が製鉄関連のものであり本村の特徴といえます。しかし、羽須美村ではこれまで綿密な分布調査が実施されておらず、これから発見される遺跡も期待される反面、記録保存という形でしか残し後世に伝えられない遺跡も増え続けるのでしょう。このような現状において羽須美村教育委員会は、文化財の保護・活用を含めた開発こそ真の開発であるとして、開発事業や土地所有者（原因者）のご理解とご協力ををお願いしているところです。

菅城遺跡は昭和47年頃、水田の排水工事中、須恵器が出土したことにはじまり、その地形から住居跡があると考えられていました。平成5年度、圃場整備計画に伴い、その計画地内に存在する菅城遺跡の取り扱いについて協議した結果、記録保存を行うこととなりました。

平成5年度、調査を担当できる人材のなかった羽須美村では、県文化財保護指導委員の吉川正氏に依頼し、まず不明確であった遺跡の範囲を確認するための試掘調査を行い、同時に平成6年度にかけ調査員を養成し、平成7年度、菅城遺跡の本調査を行いました。

羽須美村では初めての遺跡の記録保存であり、未熟な点や多くの問題を抱えておりますが、一歩一歩確実に文化財の保護・活用体制の充実、質の向上をはかっていきたいと考えております。

最後になりましたが、菅城遺跡の記録保存にあたり、地元の方々、関係機関、吉川正氏をはじめ多くの方々にご指導とご援助を賜りましたことを厚くお礼申し上げるとともに、菅城遺跡の発見を含め羽須美村古代史の先駆者である横山純夫氏には心から感謝する次第です。

今後とも羽須美村の文化財保護・活用にご協力頂きますようお願い申し上げます。

平成8年3月

羽須美村教育委員会

教育長 加藤芳藏

## 例　　言

1. 本書は、羽須美村産業課の委託を受け、羽須美村教育委員会が平成7年度に実施した、中山間地域総合整備事業（柚ノ木地区圃場整備）予定地内「菅城遺跡」の発掘調査報告書である。

2. 調査体制は次の通りである。（平成7年度）

調査主体 羽須美村教育委員会

　　加藤芳藏（教育長）

事務局 社会教育課

　　岡崎美和子（社会教育課長）

　　井上 有枝（社会教育係長）

　　三上 和彦（社会教育主事）

　　兼正 浩子（社会教育指導員）

調査員 角矢 永嗣（社会教育課主事補）

調査指導〔敬称略〕

　　今岡 一三（島根県教育庁文化財課）

　　吉川 正（島根県文化財保護指導委員）

発掘作業員

　　有江南・井上桂・岩谷清子・沖田康則・奥山木人・河野静人・五島徳晴・五島吉彦  
　　五島雅昭・齊藤登・佐々木孝益・佐々木強・柳木良二・広高章・広高光江・日野岡キ  
　　クエ・藤川幸子・三上オイマ・三上貴子・三上純・三好安江・宮口義登・築迫誠

整理作業員 三好順子

3. 発掘調査・現地説明会及び本書作成にあたり、次の方々の助言・協力を得た。〔敬称略・順不同〕

　　振井久之（大和村教育委員会）・唐溪由美子・三上智彰・森岡弘典（瑞穂町教育委員会）

　　藤田陸弘（瑞穂町教育委員会）・古川健二・田中迪亮（島根県文化財保護指導委員）・森仁市  
　　田桑正喜・久保田浩二（金城町教育委員会）・野坂俊之（湖陵町教育委員会）・水口晶朗

　　西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）・守岡正司（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　穴澤義功（房総風土記の丘研究員）・間野大丞（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　宮本徳昭（島根県埋蔵文化財調査センター）・丹羽野裕（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　椿真治（島根県埋蔵文化財調査センター）・勝瀬利栄（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　岩橋孝典（島根県埋蔵文化財調査センター）・池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　大本公良（島根県埋蔵文化財調査センター）・深田浩（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　東森晋（島根県埋蔵文化財調査センター）・寺谷隆（島根県埋蔵文化財調査センター）

　　中川寧（島根県埋蔵文化財調査センター）・佐伯徳哉（島根県古代文化センター）

　　松本浩（東出雲町教育委員会）・錦川充子・広江耕史（島根県教育局文化財課）

また、日高伊三、日高亘、丸原巧、岡本界吾、口羽万造（以上、羽須美村文化財審議委員）はすみ史楽会・阿須那公民館・公報はすみ・口羽郵便局・老人福祉センター羽須美荘 等々尚、土地所者、嘉野徳男はじめ地区の方々、**株**鈴物組・羽須美村産業課には、ご理解と多くなご配慮ご協力を頂いた。前述の皆様方に記してご謝意を表したい。

4. 遺跡での撮影は、主に河野静人の補助を得、角矢が行った。
5. 基本土層・遺構遺物の出土状況の実測は、主に五島雅昭、河野静人の補助を得て角矢が行った。
6. 遺物の実測は、岩橋孝典・広江耕史・西尾克己の指導・参加を得、角矢が行った。
7. 基本土層図・遺構、遺物の出土状況図・遺物実測図のトレースは、三好順子が行った。
8. 本書に掲載した遺物写真は、瑞穂町教育委員会の協力を得て古川健二、角矢が行った。
9. 本書の編集執筆は、前述の方々の助言・協力を得て、角矢が行った。
10. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。  
S I…堅穴住居 S B…掘立柱建物 S K…土坑 S R…自然流路（旧谷川）  
S X…その他の遺構 P…ピット（柱穴）
11. 挿図中の方位は、国土座標による第三座標系の軸方位に準じ、レベル高は標高を示す。
12. 握図の縮尺は、図中に示した。凡例、（1：3）= 3分の1 また挿図中⑤はストーンである。
13. 凡例、挿図中、第●▲図の遺物番号■は、●▲-■と記す。図版中、西→は、被写体を西側から撮影の意。
14. 凡例、本文中④は、註④であり、参考、引用文献・助言、指導内容である。（47頁に記す）
15. 図版1a.は、山陰航空事業社（1989年10月 高度600mから撮影）のフィルム（複写）を購入し、トリミングし、使用した。
16. 本書に掲載した第1図は、中央地図株式会社が建設省国土地理院の承認を得て複製した羽須美村全図（1：25000）をトリミングし、使用した。
17. 本遺跡出土の遺物及び実測図・写真等の記録資料は、羽須美村教育委員会が、羽須美村きねづかセンター内に管理保管している。

## 本文目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第3章	調査の概要と経過	4
第4章	遺構と遺物	7
(1)	基本層序	7
(2)	竪穴住居 S I 0 1~0 3	7
(3)	掘立柱建物 S B 0 1~0 2	1 5
(4)	土坑 S K 0 1	2 3
(5)	その他の遺構 S X 0 1	2 4
(6)	旧谷川 S R 0 1~0 4	2 8
(7)	流れ込み遺物	3 3
第5章	調査の成果と課題(まとめ)	4 5
註(引用・参考文献)		4 7

## 挿図目次

第1図	菅城遺跡 位置図 (1 : 25000)	3
第2図	菅城遺跡 調査前地形測量図・調査区設定図	5
第3図	菅城遺跡 調査後地形測量図・遺構配置図	6
第4図	菅城遺跡 基本土層断面図(第2図A-A')	8
第5図	S I 0 1 実測図 (1 : 60)	9
第6図	菅城遺跡 S I 0 1 出土遺物実測図 (1 : 3)	9
第7図	S I 0 2 実測図 (1 : 60)	1 0
第8図	菅城遺跡 S I 0 2 断面図・炉出土状況図 (1 : 20)	1 1
第9図	S I 0 2 出土遺物実測図 (1 : 2)	1 2
第10図	菅城遺跡 S I 0 3 遺物出土状況図 (1 : 30)	1 3
第11図	S I 0 3 実測図 (1 : 60)	1 4
第12図	S I 0 3 出土遺物実測図 (1 : 3)	1 4
第13図	S B 0 1 実測図 (1 : 60)	1 5
第14図	S B 0 1 断面図 (1 : 30)	1 6
第15図	S B 0 1 出土遺物実測図 (1 : 3)	1 6
第16図	S B 0 2 実測図 (1 : 40)	1 8
第17図	S B 0 2 遺物出土状況図 (1 : 30)	1 9
第18図	S B 0 2 出土遺物実測図 (1 : 3)	2 1
第19図	S K 0 1 実測図 (1 : 20)	2 2

第20図	菅城遺跡	S K 0 1 出土遺物実測図	(1 : 3)	2 3
第21図	菅城遺跡	S X 0 1 実測図	(1 : 60)	2 4
第22図	菅城遺跡	土層断面図 (第2図B-B')		2 6
第23図	菅城遺跡	S R 断面図 (第27図A-A'・B-B'・C-C')		2 7
第24図	菅城遺跡	S R 0 1 平面図	(1 : 150)	2 8
第25図	菅城遺跡	S R 0 1 断面図	(1 : 60)	2 8
第26図	菅城遺跡	S R 0 1 + S R 0 4 出土遺物実測図	(1 : 3)	2 9
第27図	菅城遺跡	S R 0 2 + S R 0 3 平面図	(1 : 150)	3 0
第28図	菅城遺跡	S R 0 2 出土遺物実測図	(1 : 3)	3 1
第29図	菅城遺跡	S R 0 3 断面図・遺物出土状況図	(1 : 15)	3 3
第30図	菅城遺跡	S R 0 3 出土遺物実測図	(1 : 3)	3 3
第31図	菅城遺跡	流れ込み遺物実測図 (弥生中期)	(1 : 3)	3 4
第32図	菅城遺跡	流れ込み遺物実測図 (弥生後期)	(1 : 3)	3 5
第33図	菅城遺跡	流れ込み遺物実測図 (古墳～奈良)	(1 : 3)	3 7
第34図	菅城遺跡	流れ込み遺物実測図 (中世No.1)	(1 : 3)	3 9
第35図	菅城遺跡	流れ込み遺物実測図 (中世No.2)	(1 : 3)	4 1
第36図	菅城遺跡	耕盤最下部包含遺物実測図 (江戸)	(1 : 3)	4 3

## 遺物観察表目次

第6図	菅城遺跡	S I 0 1 出土遺物観察表		1 0
第9図	菅城遺跡	S I 0 2 出土遺物観察表		1 2
第12図	菅城遺跡	S I 0 3 出土遺物観察表		1 4
第15図	菅城遺跡	S B 0 1 出土遺物観察表		1 7
第18図	菅城遺跡	S B 0 2 出土遺物観察表		2 1
第20図	菅城遺跡	S K 0 1 出土遺物観察表		2 3
第26図	菅城遺跡	S R 0 1 + S R 0 4 出土遺物観察表		2 9
第28図	菅城遺跡	S R 0 2 出土遺物観察表		3 2
第30図	菅城遺跡	S R 0 3 出土遺物観察表		3 3
第31図	菅城遺跡	流れ込み遺物観察表 (弥生中期)		3 4
第32図	菅城遺跡	流れ込み遺物観察表 (弥生後期)		3 6
第33図	菅城遺跡	流れ込み遺物観察表 (古墳～奈良)		3 8
第34図	菅城遺跡	流れ込み遺物観察表 (中世No.1)		4 0
第35図	菅城遺跡	流れ込み遺物観察表 (中世No.2)		4 1
第36図	菅城遺跡	耕盤最下部包含遺物観察表 (江戸)		4 4

## 図版目次

図版1 a. 菩城遺跡 遠景 1989年 南→.....	50	e. S I 0 3 出土遺物12-3 .....	61
b. 菩城遺跡 発掘調査前 全景 南→.....	50	f. S B 0 2 出土遺物18-3 .....	61
図版2 a. S I 0 1・S B 0 1 掘出状況 南→.....	51	図版13 a. S B 0 2 出土遺物18-4 .....	62
b. S I 0 1 北西→.....	51	b. S B 0 2 出土遺物18-7 .....	62
c. S I 0 1 遺物6-1出土状況(P-1東南).....	51	c. S K 0 1 出土遺物20-2・28-4 .....	62
図版3 a. S B 0 1・S I 0 1・S K 0 1 西→.....	52	d. S R 0 1 出土遺物26-8 .....	62
b. S B 0 1 周溝 土層堆積状況 東→.....	52	e. S R 0 1 出土遺物26-11 .....	62
c. S B 0 1 周溝(新)遺物出土状況 東→.....	52	f. S R 0 2 出土遺物28-1 .....	62
図版4 a. S I 0 2 南西→.....	53	図版14 a. S R 0 2 出土遺物28-3 .....	63
b. S I 0 2 豊溝内 遺物9-2出土状況.....	53	b. S R 0 2 出土遺物28-10 .....	63
c. S I 0 2 炉跡 遺物9-1出土状況 東→.....	53	c. S R 0 2 出土遺物28-15 .....	63
図版5 a. S I 0 3 北西→.....	54	d. S R 0 3 出土遺物30-1(S47年出土).....	63
b. S I 0 3 豊溝内 遺物12-1出土状況 東→.....	54	e. S R 0 3 出土遺物30-3 .....	63
c. S I 0 3 豊溝内 炭化物出土状況.....	54	f. 流れ込み遺物31-3 .....	63
図版6 a. S B 0 2 北西→.....	55	図版15 a. 流れ込み遺物32-16 .....	64
b. S B 0 2 内 浅い溝検出状況 東→.....	55	b. 流れ込み遺物32-18 .....	64
c. S B 0 2 遺物出土状況 北西→.....	55	c. S47年出土33-1(櫛型埴) .....	64
図版7 a. S B 0 2 豊溝内 遺物18-3出土状況.....	56	d. 流れ込み遺物33-7 .....	64
b. S B 0 2 豊溝内 遺物18-4出土状況 西→.....	56	e. S47年出土33-14(蓋なら上下逆) .....	64
c. S K 0 1 北西→.....	56	f. 流れ込み遺物33-15 .....	64
図版8 a. S K 0 1 遺物出土状況 東→.....	57	図版16 a. 流れ込み遺物33-16 .....	65
b. S X 0 1 東南→.....	57	b. 流れ込み遺物(上段)白磁器・(下段)青磁器 .....	65
c. S X 0 1 土層検出状況 東南→.....	57	c. 流れ込み遺物32-8他 天目茶碗 .....	65
図版9 a. 旧谷川跡 南→.....	58	d. 流れ込み遺物35-2他 土師質土器 .....	65
b. 旧谷川跡 北→.....	58	e. 流れ込み遺物34-10他 東播系片口銘他 .....	65
図版10 a. S R 0 3 遺物30-1出土状況(G-6区) 北→.....	59	f. 流れ込み遺物 漆器碗(F-3区周辺) .....	65
b. S R 0 2 遺物28-3出土状況(G-6区) 西→.....	59	図版17 a. 耕鑿最下部36-5他 肥前系(染付) .....	66
図版11 a. S R 0 2 遺物28-15出土状況(G-5区) 南→.....	60	b. 耕鑿最下部36-9(焼難ぎのある染付) .....	66
b. S R 0 4 T-A発掘状況 東南→.....	60	c. 流れ込み遺物 線型石匙と黒曜石片 .....	66
c. S R 0 4 T-B発掘状況 北→.....	60	d. 流れ込み遺物 敲石と擦石 .....	66
図版12 a. S I 0 1 出土遺物6-1 .....	61	e. 流れ込み遺物 木片に墨書き .....	66
b. S I 0 2 出土遺物9-2 .....	61	f. 流れ込み遺物 炉壁(鉄製) .....	66
c. S I 0 3 出土遺物12-1 .....	61	g. 流れ込み遺物 ゆ潤り津(鉄製) .....	66
d. S I 0 3 出土遺物12-2 .....	61		

## 第1章 調査に至る経緯

苔城遺跡は、島根県邑智郡羽須美村大字戸河内1124番地外（袖ノ木地区）の現水田内に所在する。昭和47年（1972年）頃、「スゲシロ」という土地の水田内で、暗渠排水工事中、須恵器片が出土したことと、戸河内川北側の段丘斜面という立地条件などから、住居跡があると考えられ周知の遺跡〔島根県遺跡地図II（石見編）G18〕となっていた。

平成5年（1993年）羽須美村は、中山間地域農村活性化総合整備事業「袖ノ木地区圃場整備」計画に伴い、予定地内に存在する苔城遺跡の取扱いについて協議した結果、記録保存を行い除去するという結論に達した。しかし埋蔵文化財担当者のなかった羽須美村教育委員会は、島根県文化財保護指導委員の吉川正氏に依頼し、同年、不明確であった遺跡の範囲を確認するための試掘調査を行った。試掘調査の調査体制・期間は、次の通りである。

調査期間 平成5年6月～8月

調査主体 羽須美村教育委員会

加藤 芳藏（教育長）

事務局 社会教育課

富永平八郎（社会教育課長）

田中 節也（社会教育係長）

土居 達也（派遣社会教育主事）

調査員 吉川 正（島根県文化財保護指導委員）

調査補助員 角矢 永嗣（羽須美村教育委員会嘱託）

調査指導 熟田 貴保（島根県教育局文化課）〔敬称略〕

発掘作業員 井上素直・岩谷清子・梅田義富・河野保・斎藤登・斎藤徹修・須波貞・寺畠啓四郎  
 樋木良二・日高エルコ・日高浩二・日高隆・広高章・広高光江・藤川昭信・三上利幸  
 三上齊・宮口義登

調査にあたり、林原修（島根県川本農林土木事務所）・中田健一（石見町教育委員会）の協力・助言を得た。〔敬称略〕

写真撮影は主に角矢が、土居実測図は吉川・角矢が分担して行った。遺物整理は角矢、遺物の接合、遺物実測及び『戸河内袖ノ木 苔城遺跡試掘調査の概要』の編集執筆は吉川正が行った。

その夏の長雨や集中豪雨により、トレンチの壁が崩れるなどの被害を受け難航したが、一部にピット、谷川の旧流路と考えられる溝、そしてほとんどの出土遺物は、同一の包含層からの流れ込みと思われるものであったが、縄文時代の一時期・弥生中期中葉以降～中世に至る遺物が出土し、この辺りでかなり長期間にわたる集落が営まれていたことが判明した①。調査後、試掘のデータをもとに本調査区を設定し、他の水田は圃場整備された。そして、平成7年度事業で発掘調査を行った。

## 第2章 遺跡の位置と環境

羽須美村は、島根県のおよそ中央部邑智郡の南東部に位置し、北は大和村、西に瑞穂町、そして南は広島県高田郡高宮町・美土里町、東に江ノ川を隔て広島県双三郡作木村と接する県境の地である。

村の中央を江ノ川支流出羽川が東流し、川沿いの標高約170mのところに阿須那の街、標高約110mに口羽の街がある。(昭和32年2月11日、旧口羽村・旧阿須那村が合併し羽須美村は誕生した。)

大字戸河内は羽須美村の南に位置し、広島県高宮町・美土里町に接する山間の地で、戸河内川(長山川)沿いに耕地を持つ集落は、阿須那の街との標高差100~200mの高原地帯となっている。この地域は標高400~500m前後の比較的なだらかな山々に囲まれた中国山地特有の準平原地帯であって、阿須那・口羽地区が出羽川によって浸食された深い溪谷地形となっているのとは好対照をなしている<sup>①</sup>。また、羽須美村は地理的に考えて、古代から山陽との文化経済の関わりが強いことが容易に想像できる。しかしながら、調査地である戸河内の歴史的資料は以外に少なく、その歴史についてよくわかっていない。「島根県の地名」山本清監修の羽須美村「戸河内村」に次のとおりあるので、前後省略し引用する。

『…(略)…中世には安須那庄のうちに含まれていた。康応二年(1390)筆写の大方広仏巻経(広島県東広島市人神宮社蔵)の奥書に、「安須那庄戸河内村」の正法庵において無照光公禪師を願主として筆写されたことが記される。天文十一年(1542)三月三日に飯田新五郎に「戸河内ゆの本名之内家の面三反、土橋面二反」が、同十日には中村新右衛門尉に「戸河内代名内まこもさこ六段」が給地として宛行われている(ともに「毛利元就宛行状」譜録)。阿須那村人庭から戸河内峠を越えて戸河内川(長山川)に沿う古道は、中世から上田村長田を経て備後三次へ至る往復路で、阿須那牛馬市への商人・牛馬の要路であった。…(略)…』<sup>③</sup>

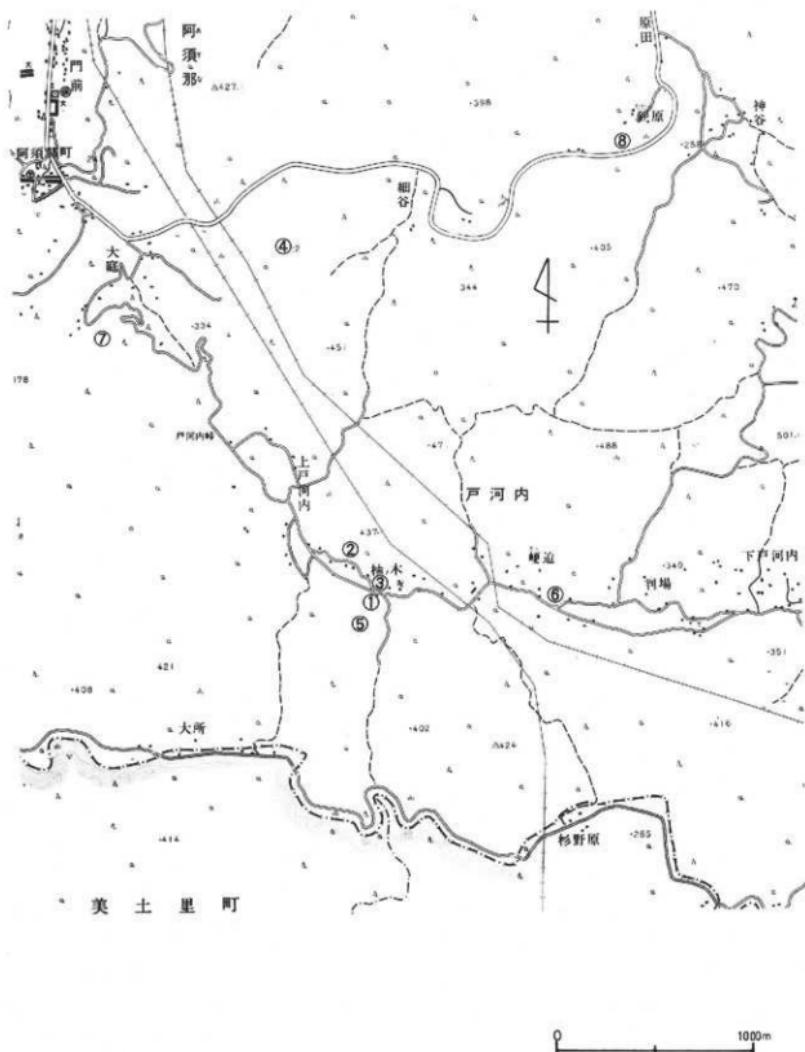
また菅原遺跡上方、村道戸河内線を東(長田)方面に約100mの所には、淨上真宗本願寺派「照光山真淨寺」がある。寛永16年(1639年)真淨(毛利隆義とも伝えられる)の開基といわれ、弘化(1845年)頃火災に会い資料消失し詳細不明であるが、小庵からこの地に移ったという。

ところで、これまで羽須美村では詳細な遺跡分布調査が行われていないこともあり、現在までに知られている遺跡の数は極めて少ない。現在までに知られている遺跡の中では、邑智郡で最大級の横穴石室を持ち、三累環頭を出土した野伏原古墳(大字雪田川瀬)は最も著名なものである。

菅原遺跡(第1図①)の所在する戸河内地区ではこれまで他の遺跡は知られていない。しかし試掘調査中、下戸河内判場地内で須恵器が出土していることを伝え聞いた。また邑南農協戸河内支所前の丘陵斜面の畑で土器の網片と鉄鋤を表面採取している(第1図⑥)。さらに袖ノ木地区、広高氏宅(屋号「土橋」)裏では小規模な製鉄遺跡を発見した(第1図②)<sup>④</sup>。

戸河内袖ノ木地区は標高およそ300m~350mにまたがる集落であり、菅原遺跡は、出羽川支流戸河内川北側の尾根から派生するなだらかな丘陵の先端部緩斜面、現水山内に所在し標高320m~330mである。阿須那の街との標高差は約160m。この地は本村でも標高の高い地域で特に雪の深いところであるが、調査区は一等米の取れる日当たりの良い場所である。

尚、今回の調査中(第1図③)や(第1図⑤)の確認もあった。第5章にて触れる。



- ① 畠城遺跡 ② (仮称)土橋製鉄遺跡(スラグ採取地) ③ 五輪塔(一部) ④ 龍影城跡  
 ⑤ (仮称) 大フケ古墳(二基) ⑥ 土器・スラグ採取地 ⑦ 大利鉢跡 ⑧ 坂口鉢跡

第1図 畠城遺跡 位置図 (1:25000)

## 第3章 調査の概要と経過

菅城遺跡の発掘調査は平成5年(1993年)、遺跡の範囲を確認するための試掘調査に始まる。第1章にあるとおり遺跡の範囲が不明確であったため、かつて須恵器が出土したとされる地を中心に、吉川正調査員が地形を考慮しながら、計45ヶ所程のトレンチを設定し行った。調査結果に基づき本調査区を設置、約3000m<sup>2</sup>に絞り込んだ(第2図)。

そして平成7年(1995年)、試掘のデータを基に6月から12月本調査を行った。

まず重機により耕作土及び耕盤の一部を削除移動、一部にみられた石垣(棚田)を削除した。さらに調査区には、昭和47年頃施した暗渠排水が機能しており湧水が考えられることもあって上層観察兼排水用トレンチ2本を、南北に調査区の上から下まで通した。内1本が第2・3図A-A'である。

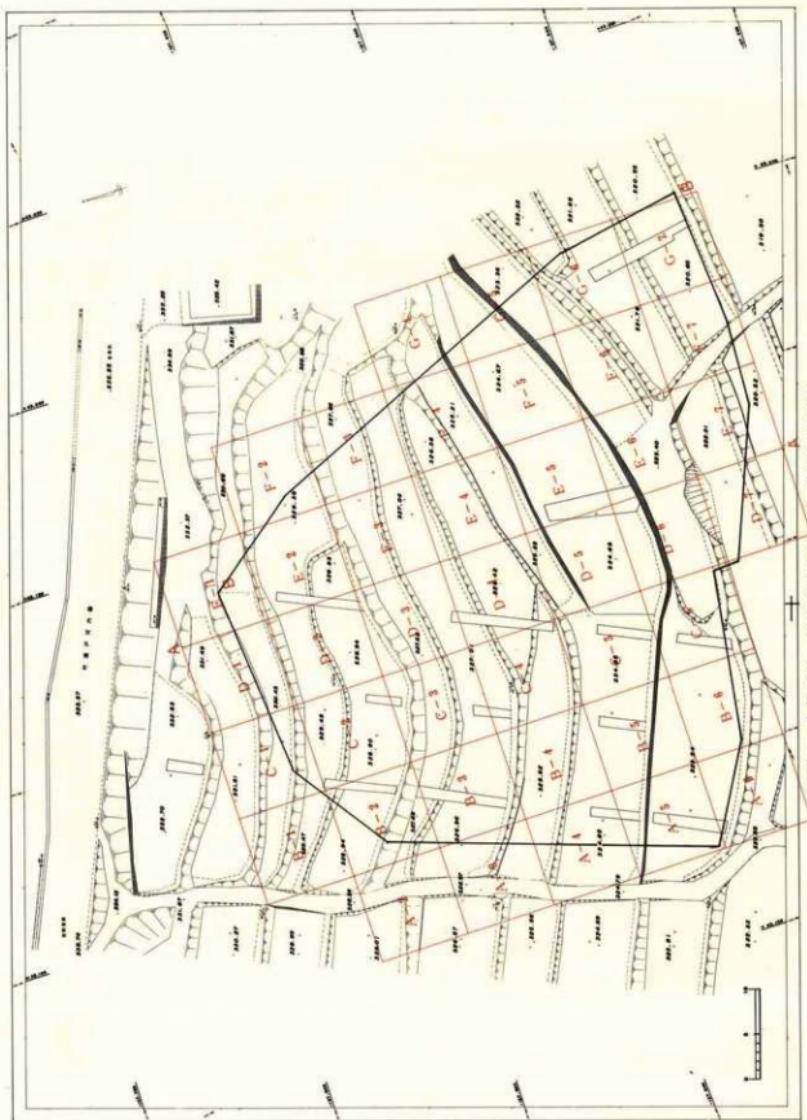
調査方法としては、残った耕盤を掘削し、統いて流れ込みによる遺物包含層を掘削しながら、遺物を調査区ごとに分け採取した。基本的な堆積状況は上層から、耕作土・耕盤・包含層・地山となるが、調査区西側では、耕作土を削除した段階で地山が露出し、流れ込みによる遺物包含層が検出されない箇所もあった。反対に調査区東側、特にF-2調査区付近は発掘現場東の尾根に面した谷部にあたり、耕盤以下の堆積土(包含層)が最も厚い所で約2mあるところもあり、作業員に苦労をかけた。また厚い堆積土には層序があったが、色調の近い堆積土では断面での分層は行えたとしても、いざ平面での掘削となるとなかなか分層が難しく、その意味での調査はうまく行えなかった。地山面は、雨水による浸食がひどく、検出した遺構も全て漫食を受けていた。さらに後世の水田化に伴って削りとられている箇所もあり、遺構に伴う遺物の残りも極めて悪い状態であった。しかし今回の調査によって弥生時代後期と考えた竪穴住居跡を2棟、6世紀後半から7世紀前半のものと思われる竪穴住居跡を1棟、掘立柱建物跡を2棟、土杭1を確認することができた。羽須美村で、古代の建物跡が確認されたのは初めてであり、弥生土器の確認も菅城遺跡が初めてとなった。

また試掘調査時に、トレンチW-H-1・W-F-2・3・W-L-1で旧谷川跡と、その中を流されてきたと思われる弥生土器や須恵器を確認していたが、今回の調査によりS R 01~04として遺物と共に再確認した。

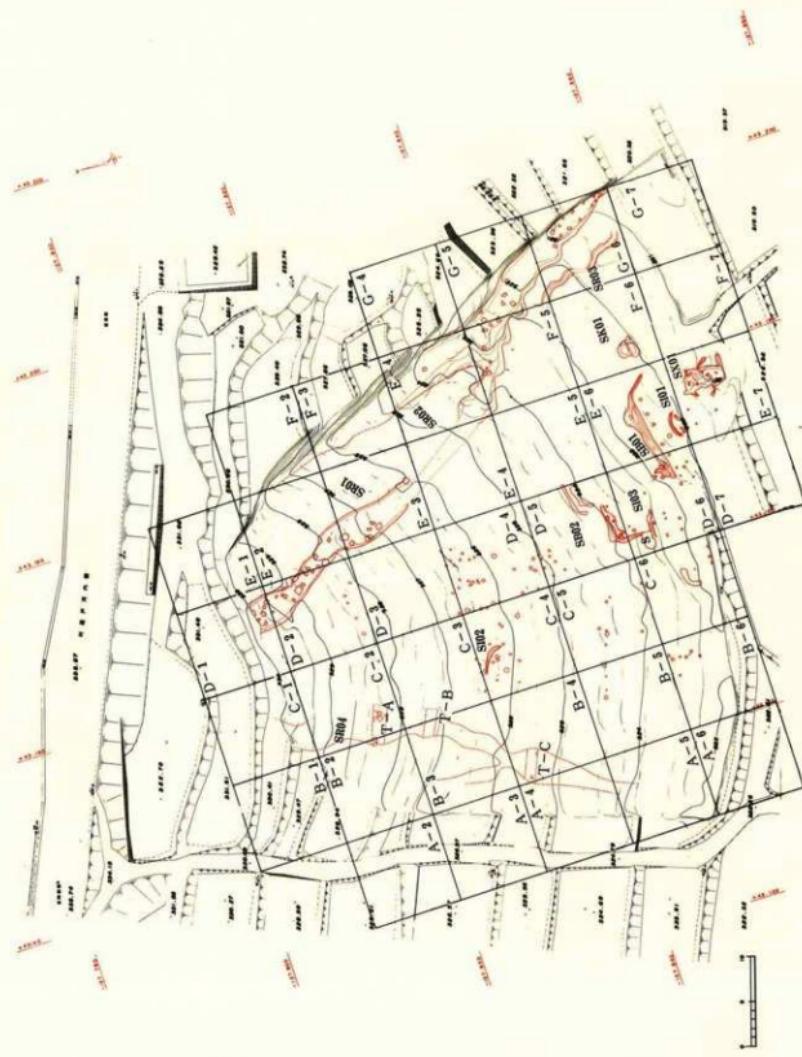
調査結果から、遺跡内から出土した遺物の多くは上方尾根筋などからの混入と思われた。このことは同一個体の土器片が広範囲の調査区から出土していることが物語っている。例えば遺物33-15はC-4・5区・D-4・6区・E-3・4区F-3・4・5区・G-6区から出土していることから裏付けられる。今回の報告ではこれらの分布の詳細な分析までには至っていない。菅城遺跡発掘調査は、知識と経験の浅さから遺跡に対し失礼もしたが、それ以上にこの調査から得たものは大きい。

12月17日には一部調査を残したものの、現地説明会を実施し、冷たい雨の降るなかにもかかわらず、はすみ史楽会(1995年10月発足)をはじめ70名を超える見学者が訪れた。県埋蔵文化センターの方々も駆けつけて頂き心強く行うことができた。

尚、菅城遺跡の発掘調査を終えることができたのは、発掘作業員の功勞によるものである。



第2図 管域道路・調査前地形測量図・調査区設定図



第3図 蒲城遺跡 調査後地形測量図・透視記録図

## 第4章 遺構と遺物

### 基本層序 (第4図及び第22・23図)

当遺跡は圃場整備予定地水田内に所在するため、まず耕作土と耕盤の一部を削除してから調査を行った。基本的な上層堆積の状況は、第2図A-A' (B-B') の断面をもとに示す。

まず調査区全体に共通する堆積として、地山〔無遺物層〕(灰褐色～黄褐色)の上に黒色土(5層)、続いて黒褐色土I(8層)、その上に耕盤である灰褐色上層(15層)がきて耕作土となる。そして地形、造構、客土等により他の土層がそれらに割り込んでくる。例えば、検出したSR01は黒墨色砂質土(1層)及び黒墨色土(3層)によって埋まっており、SR02は1層及び5層によって、SR03は5層によって埋まっている。SR出土遺物は、01・02が主に1層及び1層と砂礫I(2層)の境目から、03が5層からのものである。04は、平成5年の試掘時に遺物26-12を確認しているものの、今回の調査で行ったトレチT-A・T-B・T-Cからは、実測不可能な細片を2片認められたにすぎないこともあり、それ以上の調査は行わなかった。

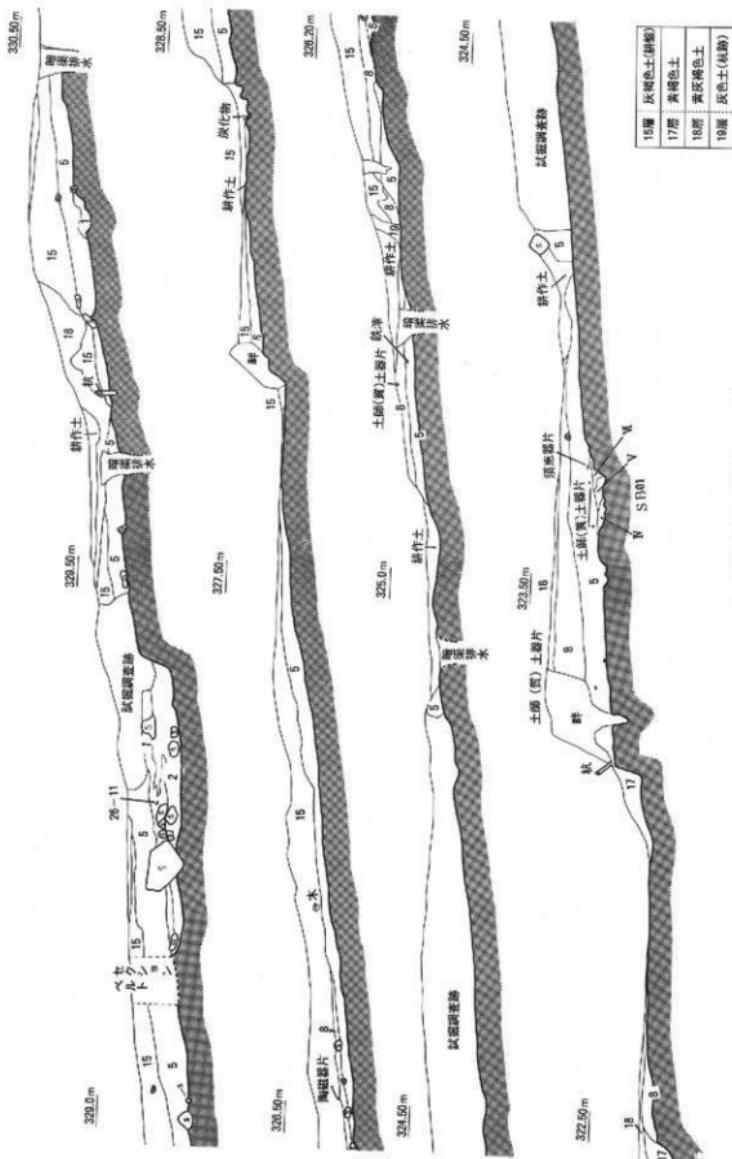
検出した遺構S I・S B・S Kは地山に残された痕跡であり、地山と5層の間に位置する(5層黒色土に対し遺構内は黒褐色土が堆積している)ことから5層堆積以前のものと思われる。その内S I 01・02は、SR出土遺物と比較して3層の堆積時期以前にその機能を失っていると考えている。いずれの遺構も埋没後、斜面を流れる雨水によって浸食され、流れ込んだ5層以降の上砂や客土によって覆われ、あるいは、後世の水田化に伴い地山まで削り取られているため、建物跡の床面や壁面も半分以上が失われており、柱穴の配列、造構の規模、切り合い関係は判然としなかった。遺構の残存状態が極めて悪いことで、遺構内出土の遺物が即、共伴関係を示すとは考えにくいものの、逆に遺構内の堆積状況からそれほどの時期のずれはないものと判断し、総合的に遺構の年代を判断した。

また、黄褐色ブロック(9層)は、8層及び5層上面を人工的に削除し、客土整地したものと思われ、黄褐色土礫混土I(11層)に包含する遺物から判断して、中世の水田等に伴う整地と考えた。これらの中層堆積状況からみて、1層から8層には自然的な堆積を、9層以降の堆積土層には客土等、何らかの人工的加工の様を呈していると思われる。さらに、15層(耕盤)の最下部からは肥前系陶磁器が出土していることから、現在まで使用してきた水田は、これまでにも多少の圃場整備が行われたにしろ、その耕盤の基本は江戸時代に遡るようである。

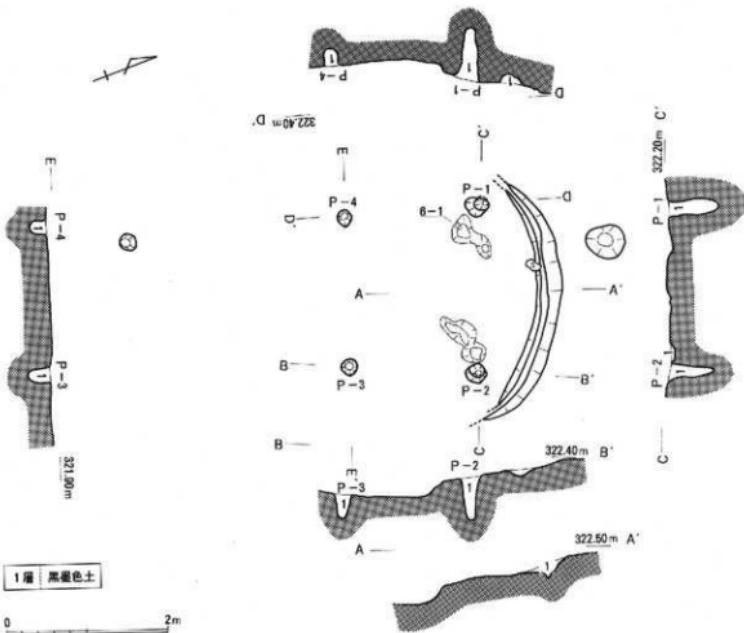
以上、旧谷川に流されてきた遺物や、その他の流れ込みによる遺物から言えることは、今回確認した建物(跡)だけでなく、旧谷川を遡った調査区上方の現在家屋のある辺りや、なだらかな尾根筋に沿って集落が営まれていたのであろうと考えられる。以下、遺構・遺物について個別に述べる。尚、基本層序はアラビア数字(1層・2層…)、遺構の覆土はローマ数字(I層・II層…)で示した。

### S I 01 (第5・6図)(図版2b.)

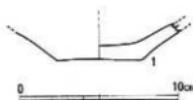
位置 調査区の南やや東側、E-6・7区に位置する。床面は北(山)側にかろうじて残る状態から、標高約322.20mを測る。



第4図 菅城遺跡 基本土層断面図（第2図A-A'）



第5図 菅城遺跡 SI01 実測図 (1:60)



第6図 菅城遺跡 SI01 出土遺物実測図 (1:3)

**形状** 5層（黒褐色土）を掘削後、地山面での精査中、壁溝とピットを検出した（図版2a.）。建物跡は埋没後、雨水や近世の水田化に伴い全体の約3分の2を失っているが、柱穴の並びと壁溝の形から4本柱の円形の竪穴住居であったと考えられる。復元した径は、約3.7mであった。

**覆土** 5層下の黒褐色土（I層）の単層により壁溝、柱穴ともに埋没している。

**床面** 約3分の1が残存する。貼床は不明。床面標高約322.20m、壁溝の深さ約30cm、壁溝下場の標高約322.10mであった。P-1の東側、P-2の西側に浅い凹みを検出したが、判然としなかった。

**柱穴** 残存部から4個のピットを確認した。P-1・2の上場、径約30cm弱、P-3・4の上場は失われている。しかし、4個のピットの下場の標高は、約321.50～321.60mを測ることから、間違いなくセットで立てられた柱に伴う穴と思われ、柱穴の深さも意識して掘られ、柱の長さも揃っていたのではないかという印象を受けた。柱間は、南北が約1.7m、東西が約2mであった。

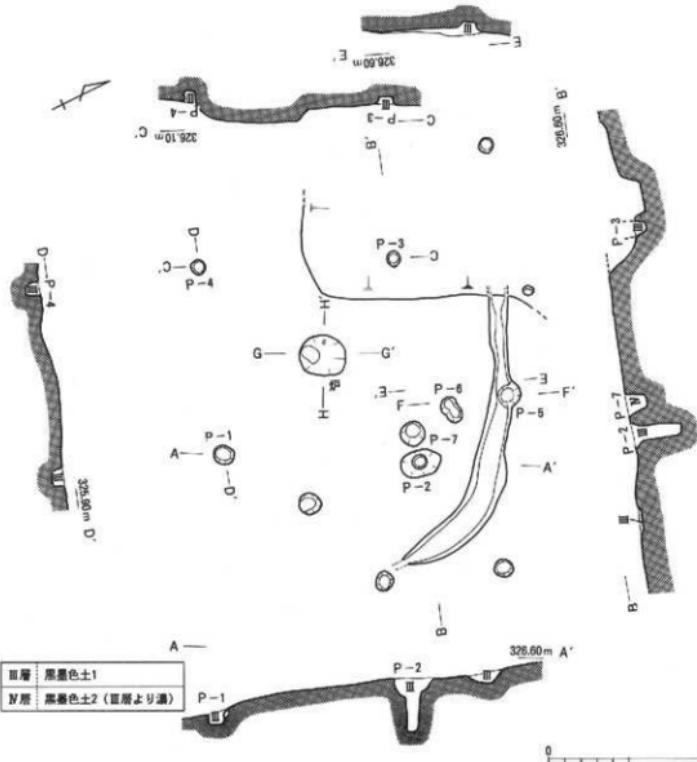
## 第4章 遺構と遺物

遺物 P-1 東側の浅い凹みに堆積したI層にのる形で、遺物6-1（斐又は臺の底部）が出土した（図版2c・12a）。床直とはいえないもののI層に包含するものであり、出土状況からS I 0 1に共伴するものとして考えた。細片であり、調整もわからないような状態であるが、I層が3層（黒墨色土）に対応すると思われ、3層出土遺物（弥生後期）と同様の時代と考えた。

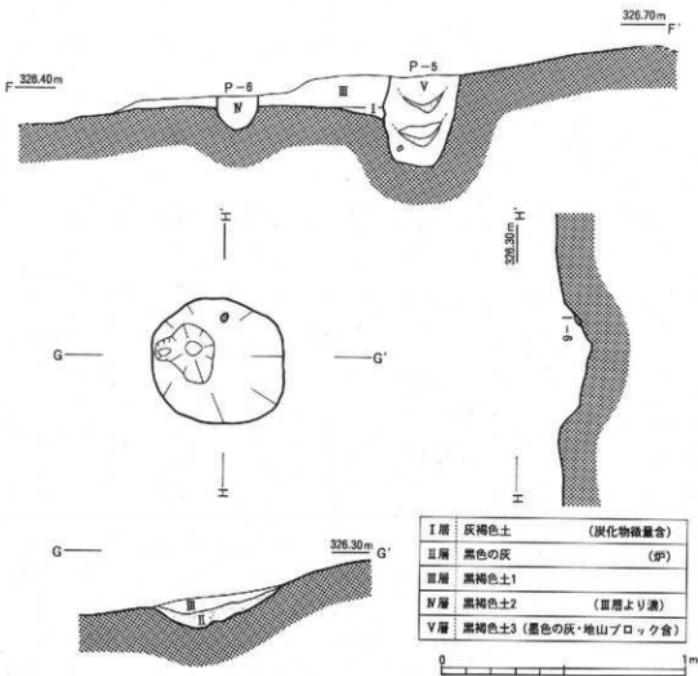
以上のことからS I 0 1は、弥生時代後期の円形の竪穴住居跡という結論に達した。

第6図 菅城遺跡 S I 0 1 出土遺物観察表

6回	器種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	上部表面 残存状態	粘 土	調 整 摘 考	色 調		外層 保 存 状 態	時 期	調査区
								外面	内面			
1	弥生器 葵?	/	5.2	1.9	不詳	2mm以下の砂粒を多量 に含む；粗	細川。残りが非常に悪い。外表面はナメ、内面 はへら kazariと思われる。底面に周辺の焼成 痕。	淡黄褐	有?	後期?	E-6	



第7図 菅城遺跡 S I 0 2 実測図 (1:60)



第8図 菅城遺跡 SI02 断面図・炉出土状況図 (1:20)

**SI02 (第7・8・9図) (図版4 a.)**

**位置** 調査区中央やや西側、C-4区に位置する。床面の標高は、北(山)側に残る状態から約326.33mを測る。

**形状** 5層(黒色土)を掘削後、地山面での精査中、壁溝とピット群を検出した。まず壁溝の形状から建物跡の規模に見当をつけ、壁溝に伴うピットの目処をたて調査を行った。調査結果、建物中央に炉を配した、4本柱の円形(あるいは隅丸)の縦穴住居であったと思われる。復元した径は、約4.5m強であった。

**覆土** 5層下の黒褐色土1(III層)の単層によって、壁溝、柱穴、炉は埋没している。P-1から4及び炉以外のピットは、P-6・P-5を代表するようにIV層(III層より濃い黒褐色土)が、III層を切っていることから、III層堆積以降に掘り込まれたピットに混入した土であると思われる。P-5は、壁溝を断ち切っていることからも、この建物(跡)に付随しないことが証明される。

**床面** 建物の廃絶後、雨水等の浸食により、P-2から南側、建物跡の3分の2は南（谷）北（山）に傾斜し、地平（床面）を保つてはいない。P-3周辺の落ち込みは、試掘トレントW-G-2の跡であり、試掘時にはP-3に気付かなかった。壁溝北（山）側の上場も失われている。壁溝下場の標高は約326.28mである。また、灰褐色土〔炭化物微量含む〕（I層）は、貼床の痕跡である可能性を考えた。

**炉** 建物跡中央に、上場の径約50cm強、北側の上場を基準として、深さ約17cmの円形を示すピットがあり、下層に墨色の灰（II層）、その上にIII層が堆積していた。II層は灰であり明らかに火の燃えた跡であることから炉跡と思われる。さらに底部西側から、地山に付く形で $3.4\text{cm} \times 2.3\text{cm} \times 0.9\text{cm}$ の川原石が出土した（遺物9-1）（図版4c.）。しかし同様の石は、後に述べる旧谷川跡には見られず、菅城遺跡付近の戸河内川でも確認できなかった。偶然に混入したものとは考えられず、何らかの意味を持つものであったと思われ、炉神のようなものではないかと考えた。

**柱穴** 建物跡に伴うものとして4穴。残りのピットは覆土と位置から、この建物の廃絶後に掘り込まれたものと考えた。P-2は、上場が約30cm~50cmの南北方向に広い楕円形で床面から約20cm程掘り込まれ、そこからさらに、上場の中心位置に約20cm弱の径で約40cm強掘り込まれている。2段階の掘り方を示すが、覆土はIII層の単層であった。その他、P-1・3・4は上場を失っているが、下場の径は約18cmを計り、下場の標高はP-1・2共に約325.62m、P-3が約325.78m、P-4が約325.60mを測った。柱間は、P-1から2、2から3、3から4が共に約2.5m。P-4から1が約2.35mを測ることからも、4本柱の建物であったことは確かであろう。

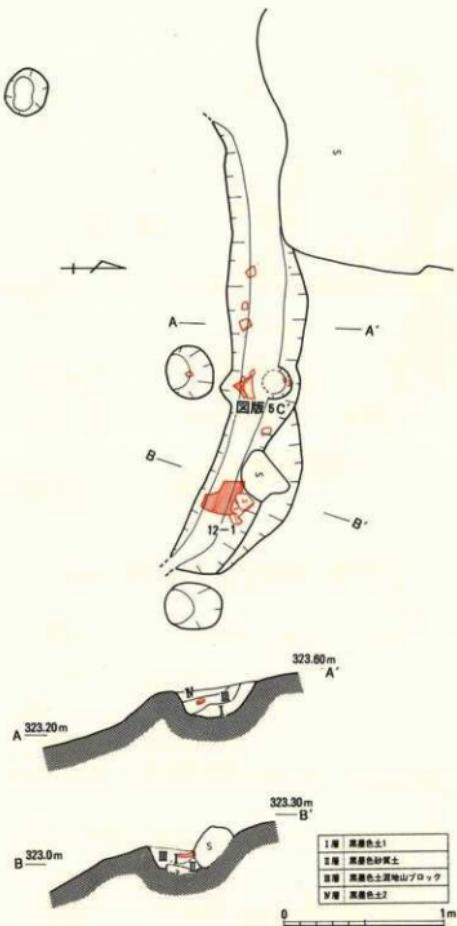
**遺物** 遺物9-1については、先に述べた通りである。また、壁溝の覆土III層から、かなり浮いた形で遺物9-2が出土している（図版4b.）。弥生中期から後期頃の壺又は甌の口縁部と思われる細片であるが（図版12b.）、共伴関係は判然としなかった。しかし、遺物9-2がIII層の包含であることと、このIII層は3層に対応していると考えられることから、おおむね弥生時代後期頃の竪穴住居と判断した。



第9図 菅城遺跡 SI02 出土遺物実測図 (1:2)

第9図 菅城遺跡 SI02 出土遺物観察表

9番	番種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	土質表面 標高	粘土	調整備考	色調	外面 状態	時期	調査区
1	炉内出土の川原石	田谷川跡及び、現在の戸河内川で、同様の石は見かけなかった。片面に最大2mm、1mm以下の小さな穴がいくつもあるが、自然のものと思われる。目方11.4K。	/	/	/	1.7	不具 に含む：粗	2mm以下の砂粒を多量 細片。残りが非常に多い。口縁部内面はナガ 以下不明。	赤褐色～明赤茶	/	住居跡に附在 C-4
2	角形壺	壺?	/	/	1.7	不具	2mm以下の砂粒を多量 細片。残りが非常に多い。口縁部内面はナガ 以下不明。	断面は 浅黄褐色	/	中期末～ 後期初?	C-4



第10図 菅城遺跡 SI03 遺物出土状況図

**SI03 (第10・11・12図)**  
(図版5a.)

**位置** 調査区南、D-6区に位置する。

**形状** 近世以降の水田化に伴い地山まで大きく削り取られていた。第11図中、北の岩に気をとられ、岩の下から遺物12-2・12-3が出土した時には、壁溝の存在に気付かず、図化をせず取り上げてしまったが、結果的に壁溝のものであった。この建物跡は、壁溝と柱穴も一部を残すのみであり床面も残っていないが、壁溝の形状から、円形の竪穴住居ではなかったと考えた。

**覆土** 壁溝内の状況として、第10図中A-A'は、まず黒褐色土層I(I層)が堆積、その上に黒褐色土混地山ブロック(III層)をはさみ、黒褐色土2(IV層)によって完全に埋まっている。III層には、土師器甕片が認められた。またB-B'では、I層とその下のI層の砂質化と思われる黒褐色砂質土(II層)に分かれる。I層の上には炭化材?がのっていた。図版5c.は炭化物と地山ブロックの接点が熱の影響を受けている。そしてI層の上に(III層)がくる。III層は

客土ではないかという印象を受けた。その他、検出したP-1から3はIV層の単層による覆土と考えた。

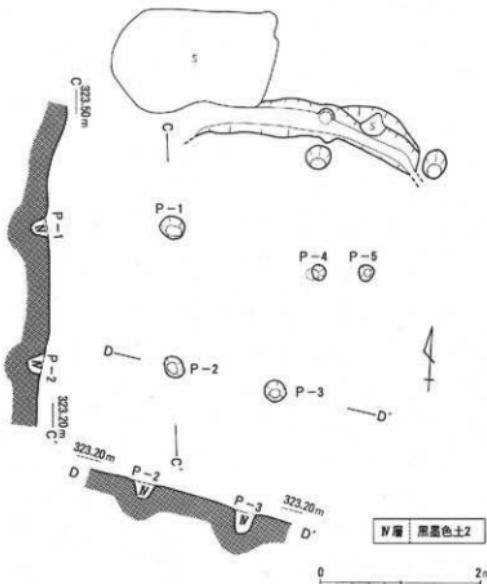
**床面** 前述のとおり失われていた。壁溝下場の標高は、約323.0m前後を測る。

**柱穴** 後世の水田化に伴い地山も大きく削除されており、いくつかを検出したものの恐らく完全に飛ばされてしまったものもあるのではないかと思われ、この建物に伴った柱穴は、判然としなかった。

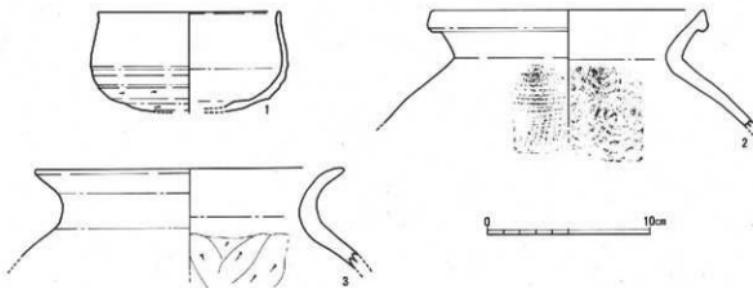
#### 第4章 遺構と遺物

P-1から3の下場の標高は、順に約322.94m、約322.88m、約322.76mであった。

遺物 全て壁溝内出土によるもの。遺物12-1は鉢、第10図中の位置で炭化物より上面にありIII層包含のものである(図版5 b.)焼成が悪く、いわゆる生焼けの状態で灰白色。反転復元し、ほぼ完形化できた。遺物33-7と同製品。広島県陣ヶ平西遺跡3号窯出土の鉢と似ている。遺物12-2・12-3は前述のとおりであり、甕の口縁部から肩部にかけての残存状態。12-2は須恵器で口縁部が玉縁のもの、これも陣ヶ平西遺跡窯出土のものと似ていた。12-3は土師器。遺物から6世紀後半から7世紀前半頃と判断した。(図版12 c. d. e.)



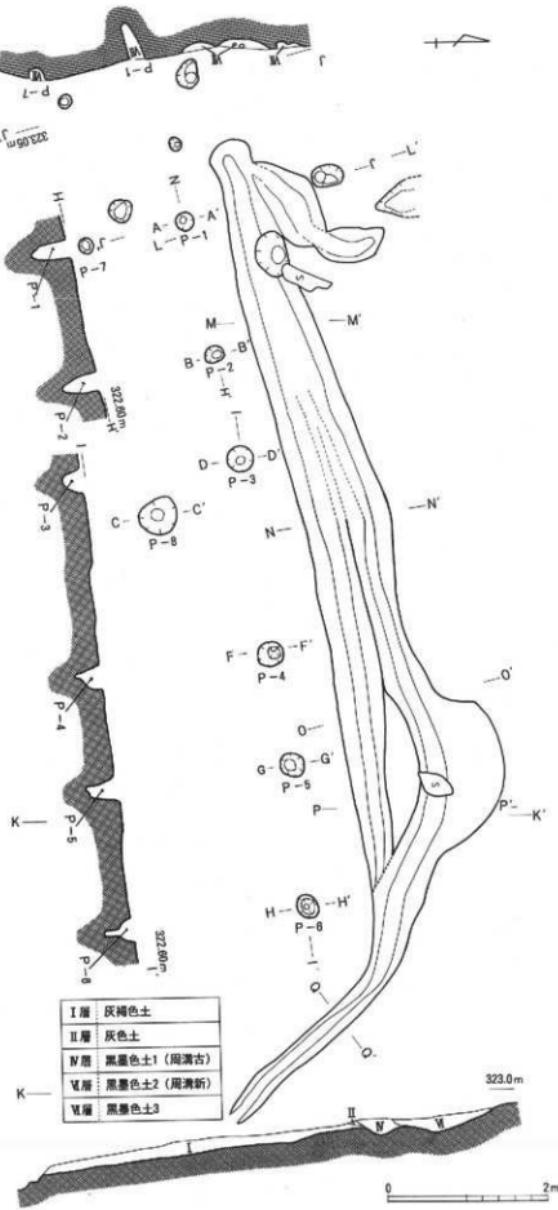
第11図 菅城遺跡 SI03 実測図 (1:60)



第12図 菅城遺跡 SI03 出土遺物実測図 (1:3)

#### 第12図 菅城遺跡 SI03 出土遺物観察表

12回	器種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	地 成	胎 土	調 整 等	色 調		時 期	調査区
								外面	内面		
1	須恵器 鉢	11.3	4.4?	6.2	不良	2mm以下の砂粒を微量含む；密	外面：口縁部(全体)回転ナチュラル粘土回転へタケヌリ、内面：回転ナチュラル粘土。	灰白	/	6c後～ 7c前半	D-6
2	須恵器 甕	16.7	/	7.4	やや不良	1mm以下の砂粒を微量含む；密	外面：口縁端部、口頭部回転ナチュラル粘土カキ目、手引き目。内面：青海波文。	淡灰	/	6c後～ 7c前半	D-6
3.	土師器 甕	19	/	6.3	良好	1mm以下の砂粒を微量含む；密	外面：口縁端部コナギ、以下ハケ目？。内面：口縁端部コナギ、以下ヘラヌリ。	黄褐	口縁部内面に有		D-6



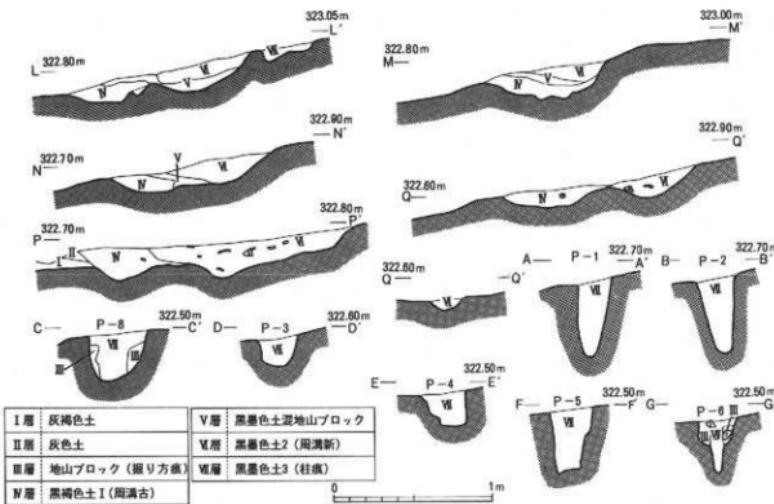
第13図 菅城遺跡 SB01 実測図 (1:60)

## SB01 (第13・14・15図) (図版3a.)

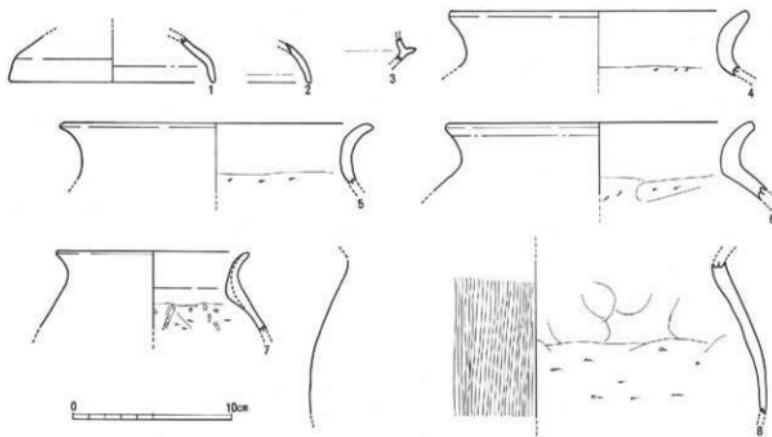
位置 調査区南や東側、E-6・D-6区 S101の北に位置する。床面は地平を保たず、雨水や後世の水田化に伴い失われたものと思われる。わずかに残る灰色土(II層)上面が生活面であったとすれば、床面標高約322.63m前後と推定する。

形状 5層を掘削後、地山面での精査中、周溝とピットを検出した(図版2a.)。完掘後、この周溝は、等高線沿いに東におよそ10m伸び、南(谷)方向に進路を変え約2.6mのところで排出するという検出状況であった。この周溝の特徴として、途中を新旧掘り分けていることと、西側の周溝の端部は南(谷)側に出水を排するよう切っていないことである。地形的に必要でなかつたか、あるいはそちらに流れて欲しくない何かがあったのか、単に溝が浅く残存しないのか不明である。

## 第4章 遺構と遺物



第14図 菅城遺跡 SB01 断面図 (1:30)



第15図 菅城遺跡 SB01 出土遺物実測図 (1:3)

**覆土** 地山の上に灰褐色土 (I 層)、これは質感は地山であるが、地山に対し濁りのあるものである。I 層の上に II 層 (灰色土) があり、前述のとおり当時の床面 (生活) と関わっていたと推測した堆積である。建物跡北 (山) 側に沿う周溝は完掘後、全面ではないが 2 本存在し、覆上の観察から、これらは同時に機能していたのではなく、新旧の時期差があるものと判明した。はじめ、黒墨色土 1 (IV 層)

が堆積した周溝が存在していたが、恐らく水害等の被害でIV層の混入を受け、周溝端部はIV層を排除してあらたに使用したもの、中心部東側はその経験から周溝を改良するためにIV層を残し、黒褐色土・混地山ブロック（V層）を貼りつけ壁とし、新しく周溝を作り直していると推測した。この周溝（新）に建物の廃絶前後、黒褐色土2（VI層）が堆積したと思われる（図版3b.）。尚、周溝（新）は、P-5北側で周溝（旧）と完全に分かれ弧を描くが、なぜ湾曲させたのか、P-5と離したのか、よくわからないが全体的に建物から周溝を遠ざけたようである。周溝下場の標高は、西側端部約322.60m、東側Q-Q'約322.40mを測り、第13図の平面図からも、西側端部に北から流れてきた水が入り、東側に流れ行く水路であったことがわかる。また柱穴に関しては、P-6・8で検出した地山ブロック（III層）が、柱を固定したもので、黒褐色土3（VII層）がVI層堆積以降のものであると思われる。

**床面** 前述のとおり失われており、周溝側の柱穴に対応すると考えられるピットも失われていた。

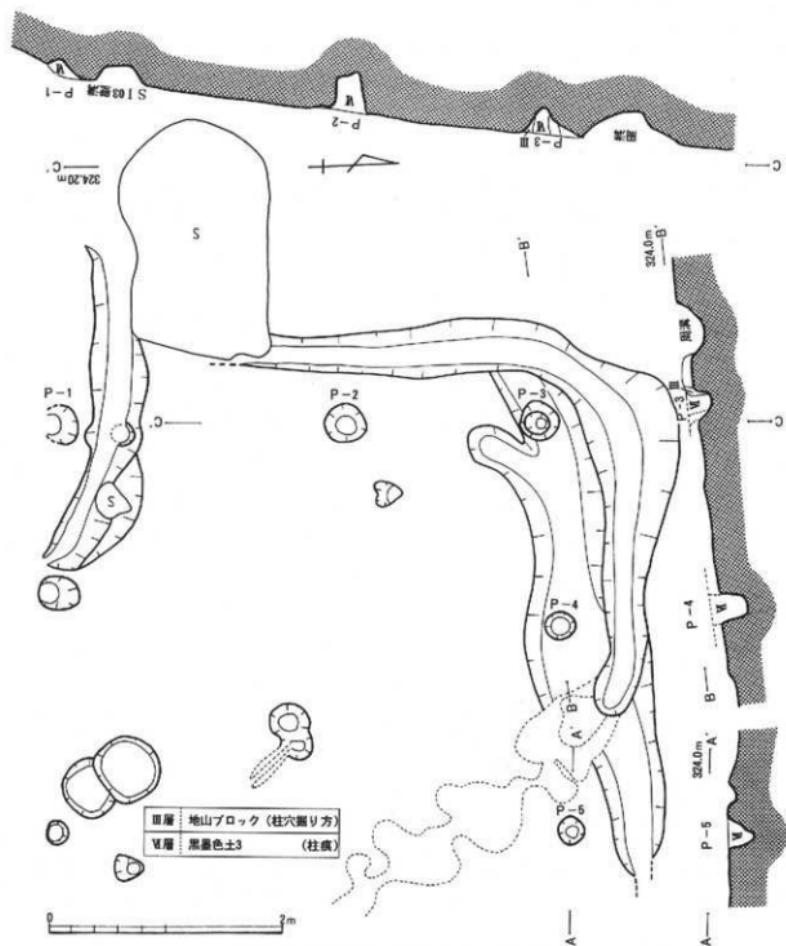
**柱穴** 周溝に沿って、周溝南側にP-1から6を検出した。P-3から6は掘り方が一定しておらず、また柱間も最大2.4m、最小1.4mと一見して無作為に見え感じられる。しかし、柱穴下場の標高はP-3が約322.30mである他はいずれも約322.10mであり、ほぼ一列にならんでいることからこの建物（跡）に共伴するものと考えた。その他、P-8は柱穴に違いないが位置的に、P-7は柱穴下場の標高等共伴性について判然としない。以上のことから、この建物（跡）は掘立柱建物と考えられる。その規模は、周溝に対し1棟の建物であれば、梁行（間）1間以上（不明）、桁行5間というものになる。

**遺物** 図化した遺物は、全て周溝（新）VI層に伴うものである（図版3c.）。IV層等でも微量出土したもの、細片でしかも残存状態が悪く観察できるものではなかった。遺物15-4から15-8は上師器の甕であり、15-1から15-3が蓋壺である。15-1は蓋であり、稜・沈線がなく肩部から意識的に内反している。天井部は残存しないが、大谷編年出雲5期に相当するものと考えた。15-3は甕、立ち上がりは欠けているが、受け部よりはっきりと長いもの、大谷編年出雲4期相当と思われた。

S B 0 1の時期は、前述の須恵器と、その他の菅城遺跡出土の須恵器がほぼ同様の時期を示していることから考えて古墳時代後期、6世紀後半から7世紀前半頃のものと思われる。

第15図 菅城遺跡S B 0 1出土遺物観察表

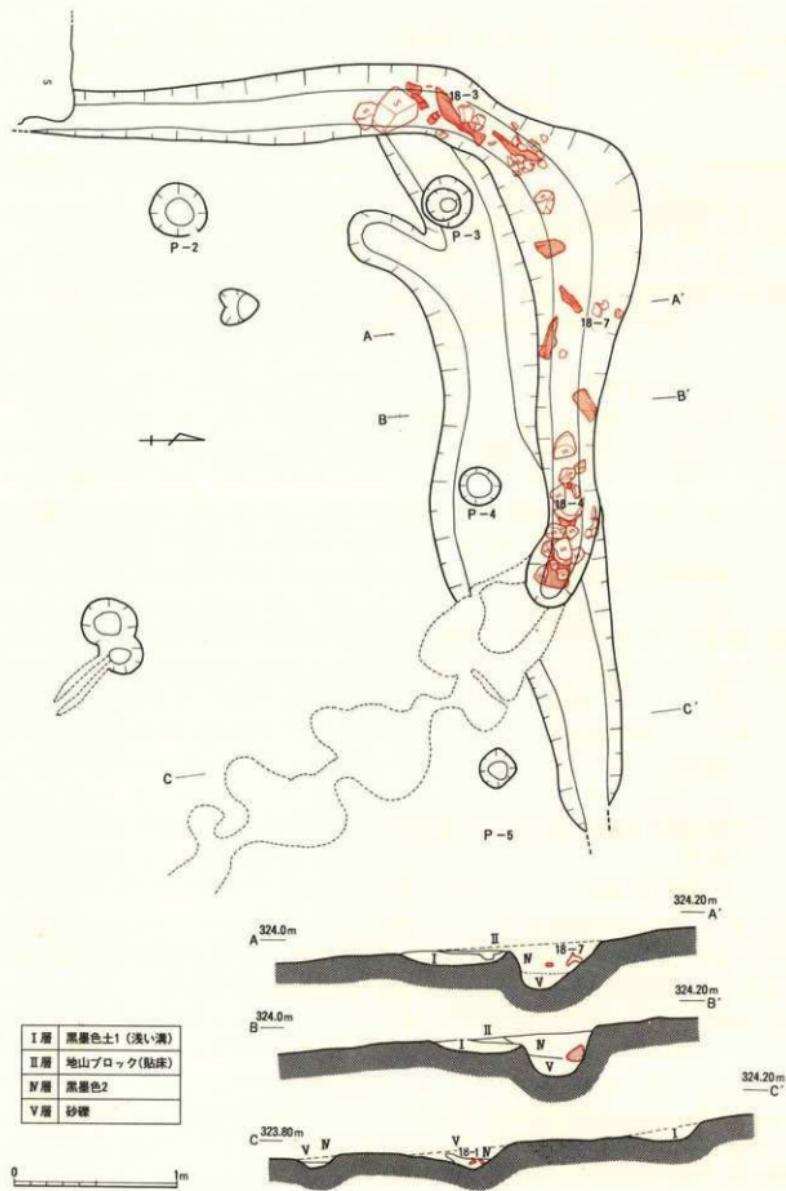
15番	器種	口径 cm	底高 cm	焼成	胎 上	調 整 等	色 調		外 面 様	時 期	調査区
							外 面	内 面			
1	須恵器 环壺	13	2.9	良好	1mm以下の砂粒を微量含む：青	残存部全て回転ナデ			灰	/	7世紀前半 D 6
2	須恵器 环壺	-	2.4	良好	1mm以下の砂粒を微量含む：青	残存部全て回転ナデ			灰	/	6世紀後半 E 6
3	須恵器 蓋壺	-	1.6	良好	1mm以下の砂粒を微量含む：青	残存部全て回転ナデ			青灰 灰赤	/	E - 6
4	上師器 甕	18.5	4	良	2mm以下の砂粒を微量含む：青	外表面：口縁部ナデ、底部以下不明。内面：口縁部ナデ、底部以下ハラケズリ			浅黄灰	/	E - 6
5	上師器 甕	19	3.8	良	1mm以下の砂粒を微量含む：青	外表面：口縁部コロナデ、底部以下不明。内面：口縁部ナデ、底部以下ハラケズリ			灰黄	/	E - 6
6	上師器 甕	19	5	良好	1mm以下の砂粒を微量含む：青	外表面：口縁部コロナデ、底部以下ソコナデ。内面：口縁部コロナデ、底部以下ハラケズリ			浅黄灰	/	E - 6
7	上師器 甕	12	5	良	1mm以下の砂粒を含む	外表面：口縁部コロナデ、底部以下ハケ目？。内面：口縁部ナデ、底部以下ハラケズリ			純い灰 純い青	/	E - 6
8	上師器 甕	-	9.5	良	2mm以下の砂粒を含む	外表面：網目ハケ目。内面：腹部残存部、下半分強 方向のハラケズリ、上半分ナデ（指印跡）			純い灰 純い青	/	E 6



第16図 菅城遺跡 SB02 実測図 (1:40)

**SB02** (第16・17・18図) (図版6 a.)

位置 調査区南D-5・D-6区、S I 0 3の北に位置する。床面の標高約323.96m前後と考えられる。



第17図 薩城遺跡 SB02 遺物出土状況図 (1:30)

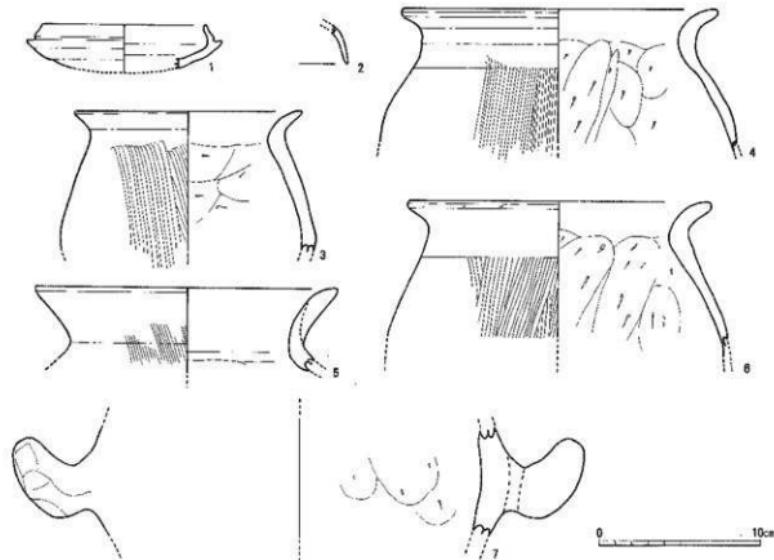
**形状** 5層を掘削後、地山面での精査中まず西側と北（山）側に、くの字形状に溝を検出した。この溝の堆積土上面から土師器片が出土しはじめたこともあり、建物（跡）に伴う周溝（壁溝）として考え、柱穴を探した。しかしこの遺構も他の遺構同様、自然の影響による浸食や、後世の水田化による地山に及ぶ削平でその全体を留めておらず、P-2・3・4は確実にこの建物（跡）に伴うものとして確認できたものの、P-1は残存状態と位置的に、P-5は周溝（壁溝）との関係上、その他検出したピットを含め、疑問点が残った。ただ、4本柱の豎穴住居として考えた場合、P-2・3・4に対応する4本目のピットの位置に、地形（地山）の残存状況からして何らかの痕跡を留めているはずだが、存在しなかったため、調査結果からP-5は共伴すると考え、最終的に築行が1間以上、桁行2間以上の掘立柱建物（跡）ではなかったかと判断するに至った。また、西にある岩の南側下にある、今回S I 0 3の壁溝として検出した溝が、実はS B 0 2の周溝ではないかとしても検討したが、切り合の前後は判然としないものの、確実に溝の下場の標高が、S I 0 3壁溝とした方が低くつまり段差があり、S B 0 2周溝と同じ溝でないことと、S I 0 3のものとした溝は、明らかにS B 0 2周溝とは違う自立した弧を描いていることから報告どおり別々のものとした。

**覆土** （第17図A-A'・B-B'）（図版6b.）のとおり、まずこの建物以前には、P-3・4に沿う位置で、東西方向に人工的な溝が存在していたが、恐らく水害によって、黒墨色土（I層）が堆積したと思われる。その後この建物を建てる際、I層の上に地山ブロック（II層）を貼って、床面（平地）にしたものと思われる。この溝は、地山面で柱穴を探すための精査中、且層中のI層の絡みによる濁りと、この建物廃絶後の浸食によってこの溝北側のII層が飛ばされ、I層が露出していたことから気づき、サブトレンチを入れて判明したものである。P-3・4は、II層上面から検出したことから、II層を施した後に柱穴を発していることは明らかである。S I 0 3のIII層が、S B 0 2のII層に対応しているとすれば、S B 0 2はS I 0 3に統くものと考えられるが、結論には至らなかった。尚周溝中、黒墨色土（IV層）【遺物包含層】は、S B 0 2が廃絶する前後に堆積したもので、砂礫（V層）【遺物包含層】は、IV層の砂質化したものと思われることから、IV・V層堆積の時期差はないと考えた。C-C'で観察した堆積は、雨水により流れ込んだ土砂が、P-4東で終わっている周溝端部から溢れ出し、地面を浸食した痕跡であるが、やはりIV層堆積以後のものというよりは、IV・V層と同じ堆積であると思われた。柱穴は、P-3・4が掘り方を示す地山ブロック（III層）と、柱痕を示す黒墨色土3（VI層）によって埋まっている。このIII層は、II層よりI層による濁りを強くする。P-4・5は、VI層の単層により埋まり、P-1も同様と思われた。

**床面** 前述のとおり、ある程度失われており、建物全体の規模は不明であったが、生活面は恐らく整地され、貼床も施されその標高は約323.96m前後であったと考えている。炉跡等その他の痕跡は検出できなかった。周溝下場の標高は、第17図A-A'・B-B'で約323.72mを測る。

**柱穴** 前述のとおり、P-2・3・4及び5以外は判然としなかった。柱間は、P-3から4、P-4からP-5が共に約1.75m。P-2からP-3が1.7m。P-1からP-2が約2.5mである。第16図のS I 0 3壁溝中から検出したピットからP-2が約1.9mであった。このピットあるいは、P-1が共伴するものであれば、堆積的にもこのS B 0 2は、S B 0 3以後のものという印象を受ける。柱穴下場の標高は、P-3が約323.72m、P-4・5が共に約323.6m、P-2が約323.44m、P-1が約323.3m。S I 0 3壁溝中のピットは約323.1mであった。

遺物 周溝中に堆積したIV・V層に包含するものである。特徴として、ほとんどの上部器表片が第17図中遺物18-3・18-4のように、炭化した木片の上にのっていることがあげられる(図版7 a, b.)。この木片は、材木の可能性が強いと思われたが加工痕等は不明であった。第17図B-B'の炭化した木片の径は約10~15cmを測る。またB-B'は、一見してV層が堆積した上面に炭化物(と土器)がのり、その上からIV層が覆っているようだが、大部分はIV層とV層の境目に包含しておらず、やはりV層は



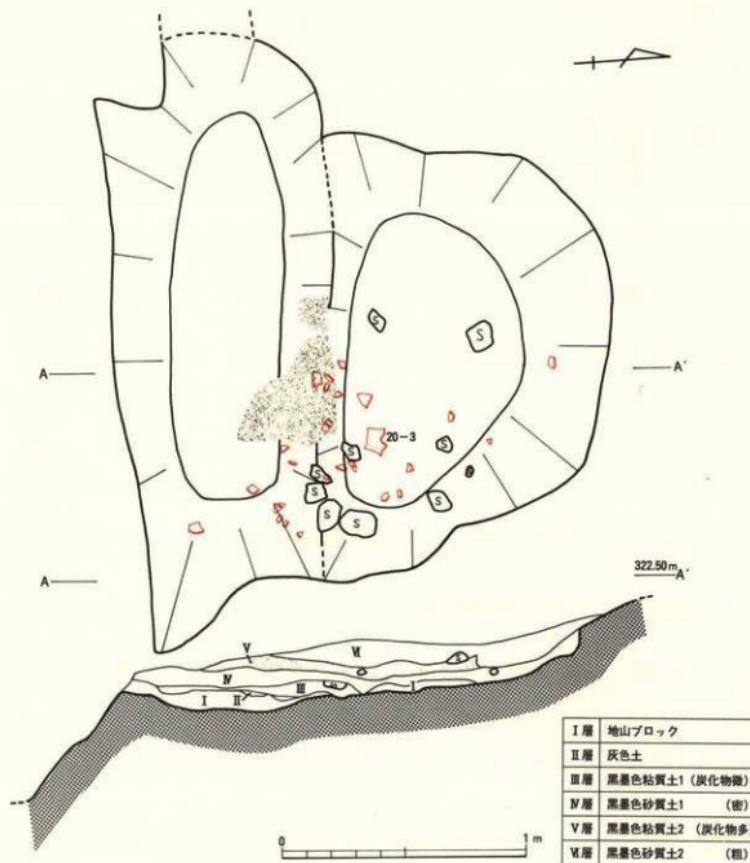
第18図 营城遺跡 SB02 出土遺物実測図 (1:3)

第16図 营城遺跡 SB02 出土遺物観察表

18号	器種	口徑 cm	喉高 cm	現状	胎	1.	式 等		色 質	外觀 外面 内面	時 期	調査人
							残存基部ナナ	胎口				
1	環形器	10.2	2.7	良好		1mm以下の砂粒を少量含む:素	外縁部ヨコナナ、胎部以下勢いのあるハケ目。内縁部ヨコナナ、以下ヘラケズリ	灰白	6 C後~ 7 C初期	D-5		
2	環形器	环道	2.4	良好		砂粒無に等しい:素	残存基部ナナ	灰	6 C後~ 7 C初期	D-5		
3	土師器	甕	14	8.7	良好	1mm程度の砂粒を含む:素	外縁:ヨコナナ、胎部以下勢いのあるハケ目。内縁:ヨコナナ、以下ヘラケズリ	淡黃褐	有	D-5		
4	土師器	甕	18.9	9	良好	2mm以下の砂粒を含む	外縁:ヨコナナ、胎部以下やや粗なハケ目。内縁:ヨコナナ、以下ヘラケズリ	褐色	有	D-5		
5	土師器	甕	19.8	4.5	良好	1mm以下の砂粒を少量含む:素	外縁:ヨコナナ、胎部以下ハケ目。内縁:ヨコナナ、以下ヘラケズリ	褐色	有	D-5		
6	土師器	甕	18.6	8.4	良好	2mm以下の砂粒を含む	外縁:ヨコナナ、胎部以下ハケ目。内縁:ヨコナナ、以下ヘラケズリ	褐色	有	D-5		
7	土師器	甕	6.9	残存状態不良	5mm以下の砂粒を含む:素	腹壁:不明(外縁:ナナ?、内縁:ヘラケズ?)	浅黄	明黄褐		D-5		

IV層の砂質化によるものと考える。以上の遺物の包含状況から、SB02に共伴するものとは言い難い反面、流れ込んだものと考えてもそう遠くからのものとは思われず、SB02北(山)側には遺構を検出できなかったことも含め、時期差はそれほどないものと考えた。遺物18-1・2は、第17図C-C'のV層からのものである。遺物18-4は口縁部を真下にして出土。遺物18-7は瓶。(図版12f, 13a, b.)

SB02は、6世紀後半から7世紀初頭のものと判断した。



第19図 萱城遺跡 SK01 実測図 (1:20)

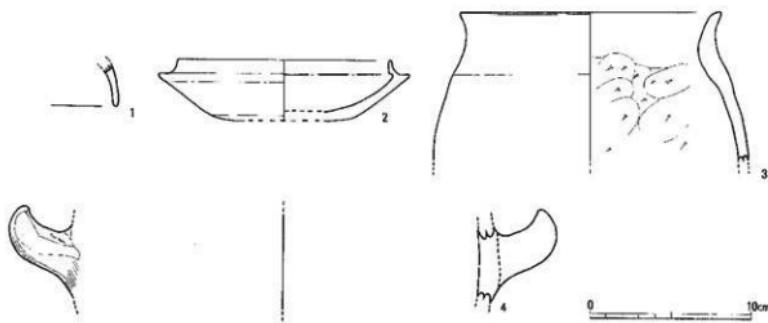
## SK01 (第19・20図) (図版7c.)

**位置** 調査区南東F-6区、SB01周溝東側端部から約3m東に位置し、土杭として検出したものである。下場の標高が約322.0m前後を測る。

**形状** 5層掘削後の精査中検出した。埋没後の雨水による流出と、南側は、後世の水田化に伴い削りとられ、遺構の一部を失っている。復元した上場の径は、南北に約2.3m程度。完掘後の結果、底部中央が、東西にわずかに高くなっていることから、およそ二つに分けて掘り込まれたものと思われるが、しかし堆積は二分せず切り合ひは無かったことから、一つの遺構として考えた。また、SK01の西側に浅い溝らしきものを検出したが、SB01周溝東側端部との関係等、判然としなかった。

**覆土** I層は掘り込んだ後に改めて埋めた(貼った)ものと思われた。II層は灰の層である。V層には炭化物が多量にあり、やはり何かを燃やした跡と思われる。尚、V層炭化物上面VI層下面からの遺物が一番多かった。ただし調査ミスにより、SK01東側半分は岡化する前に遺物を取り上げてしまったり、層単位の遺物の観察を行わなかった、反省する。

**遺物** 遺物20-1は須恵器壺蓋、20-2(図版13c.)は須恵器蓋環であり、20-3は土師器蓋、20-4が瓶である。尚20-3以外は前述のミスから正確な出土地点は不明である。(図版8a.) 調査結果から、土杭は焼却(ゴミ捨て)場のようなもので、その時期は20-2から、6世紀後半から7世紀初頭頃と思われる。



第20図 菅城遺跡 SK01 出土遺物実測図 (1:3)

第20図 菅城遺跡 SK01 出土遺物観察表

20番	基種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	I層表面 既存地盤	始上	調査備考	色調		時期	調査区
								外面	内面		
1	須恵器 壺蓋	/	/	2.8	陶成地盤	2mm以下の砂粒を含む:灰	既存部は同軸ナデ	灰白	/		F-6
2	須恵器 蓋環	13.3	?	3.8	陶成地盤	2mm以下の砂粒を少度含む:灰	同軸ナデ、底部を1mm幅のヘラで、同軸によらないハラ調整	白灰	/	6C後半～ 7C初期	F-6
3	土師器 蓋	16	/	9.3	不良	4mm以下の砂粒を含む	詳細不明。口縁部剥離部:外側同軸ナデ、内側 底部部:ヘラケズリ	浅黄灰	有		F-6
4	土師器 蓋	/	/	4.7	不良	2mm以下の砂粒を含む:灰	把手下部:ハケメ	浅黄灰			F-6

## 第4章 遺構と遺物

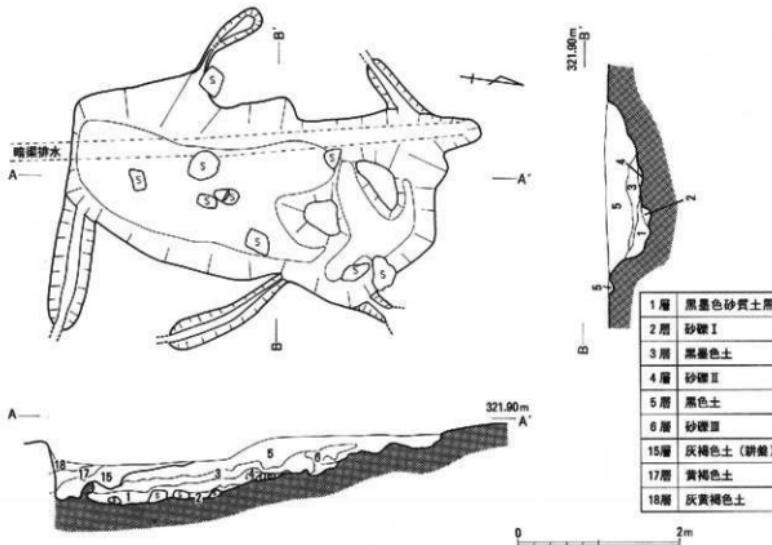
### S X 0 1 (第21図) (図版 8 b.)

**位置** 調査区南端やや東側、E-7区に所在する。S B 0 1・S I 0 1の南に位置している。標高は第20図A-A'・B-B'のとおりである。

**形状** 5層掘削後の精査中、南北に延びるおよそ楕円形のプランを確認し、周辺に遺構の多いことから、遺構の可能性を考え調査したものである。しかし完掘後、その底部は地形に沿ってなだらかに傾斜し、径40cm以下の自然のものと思われる石がころがっているという状態で、後に述べるS Rの川底と同様であった。S X 0 1の南側と北側は後世に失われたにしろ、層序的にS I 0 1の時期には、ある程度機能していたと思われたが判然としなかった。尚、S Xの上場に確認した5本程の浅い溝についても判然としないが、恐らく5層が堆積する時にいた、流れ込みあるいは流れ出た痕跡であろう。

**覆土** 土層観察から、遺構内の堆積ではなく、むしろ基本土層を示す堆積であることがわかった。したがって上層をアラビア数字で示す。まず1から6層までが自然的堆積を、5層上面の15・17・18層は、客土である。(図版 8 c.)

**遺物** 5層中から土師質の細片が微量認められたのみで、予想に反して観察できるようなものが出土しなかった。以上のことから、S X 0 1は5層堆積によってその機能を終えた。S Rと同様のものである可能性が強いと判断するに至った。



第21図 萱城遺跡 SX01 実測図 (1:60)

**結①** 羽須美村内における他の古墳時代の遺跡について、以下『羽須美村誌上巻』から横山純夫氏執筆を参考・引用して述べる。まず、羽須美村における古代史研究の流れとして次のとおりである。

「羽須美村の古代遺跡が初めて紹介されたのは、大正6年刊『阿須波の流』および大正15年刊『口羽郷土史』である。その後『阿須波の流』は…（中略）…『阿須波史考』となって出版されている。…（中略）…邑智郡全体の古代遺跡ということになると、…（中略）…大正13年刊『島根県史』第四巻…（中略）…その後昭和12年には『邑智郡誌』が刊行されるのである。…（中略）…邑智郡内の古代史研究を考古学的立場から飛躍的に進展させたのは門脇俊彦氏である。氏は昭和31年、教員として邑智町に赴任して以来十数年間にわたって、本郡の古代史解明につとめてこられた。…（中略）…氏の業績はそのまま瑞穂町在住の考古学研究者吉川正氏に受け継がれ現在にいたっているのである。…（略）」<sup>2]</sup>

横山氏も門脇氏の指導を受けられたとあり、横山氏が旧阿須郷中学校教諭時代に羽須美村内の遺跡・出土遺物について調査・考察され、昭和62年刊『羽須美村誌』にまとめられたものが、羽須美村古代史の基礎資料となっている。「菅城遺跡」の発見、周知も氏の功績によるものであり、今回発掘調査によって確認した古墳時代の遺構に関連して、村内のものを下表にて紹介する。

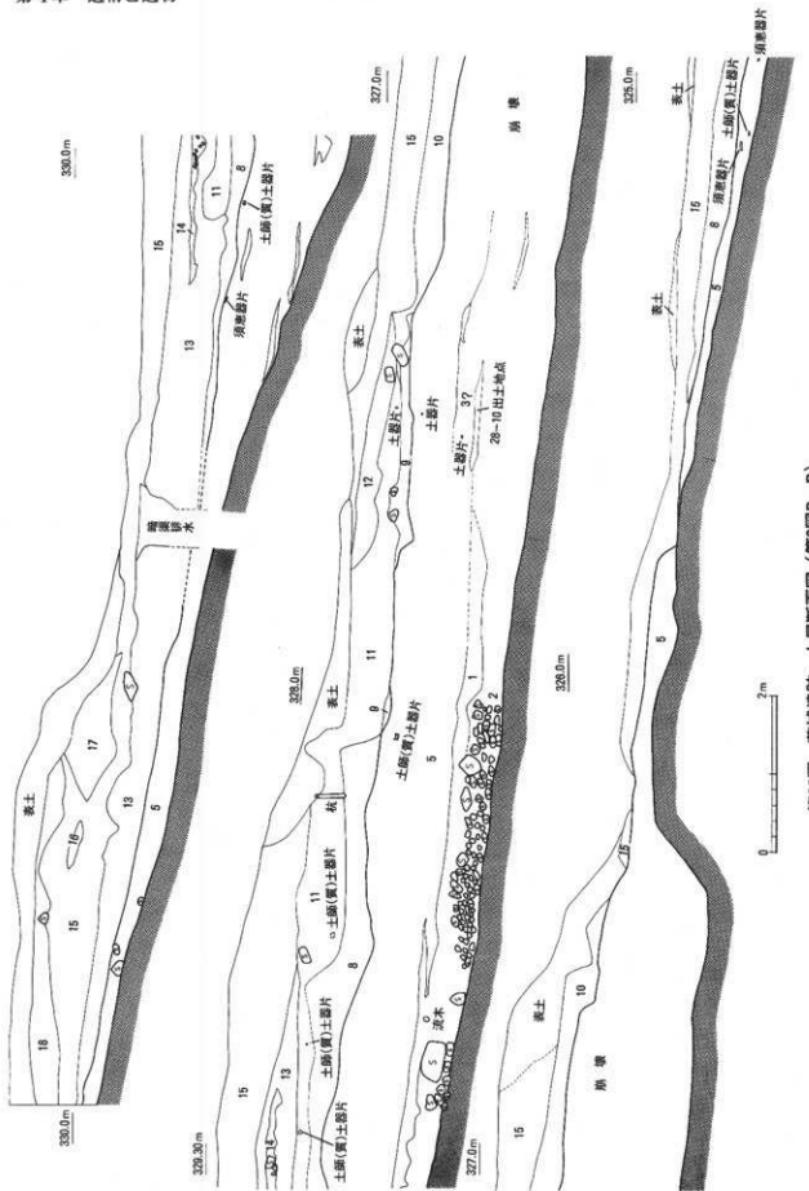
古墳(墓)名	所 在 地	概 要	造構	遺 物	古墳(墓)名	所 在 地	概 要	造構	遺 物
淨福寺横穴	上田 長田	人骨・直刀・耳環他	消滅	現存	草野ノ池古墳	木須田塚ノ池	須恵器	不明	不明
次郎山古墳	上田 松木	箱式石棺・木炭多量	消滅	消滅	神原古墳	宇都井 神原	横穴式石室・須恵器	消滅	不明
宮尾山古墳	下口羽宣尾山	箱式石棺・錘・鏡・刀	消滅	現存	野伏原古墳	上田 長田	横穴式石室・三蓋環頭	現存	現存
中原古墳	下口原 中原	未調整で不明	径約8mの円墳	草野ノ原古墳	雪田 川淵	横穴式石室・須恵器	現存	現存	

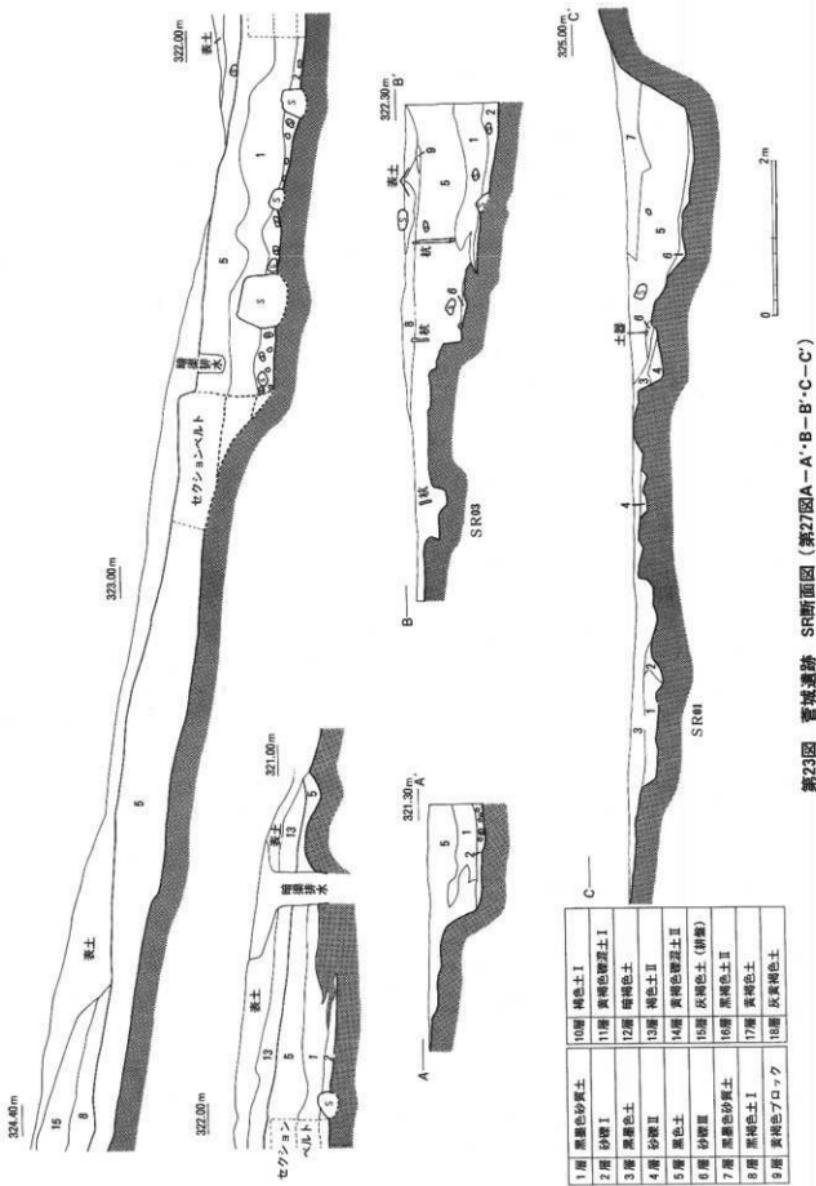
以上が羽須美村の周知の古墳である。ただし、石室の現存も破壊を受けているものであったり、出土遺物に関するもの全て現存するものではない。（後述する横尾城古墳も、現在周知の遺跡である。）

羽須美村においてこれまで確認されている古墳は全て古墳時代後期のものである。菅城遺跡のS I 0 3・S B 0 1・0 2・S K 0 1も同様であった。建物跡の確認としては菅城遺跡が初めてになる。

ところで、羽須美村内では至る所で鉄穴流しを行っているため、地形も変わっている場合が多く、それ以前の城館跡や古墳、集落跡等も失われていることが多いと想像できる。しかし、これから総合的な分布調査を実施することで、先人の生活跡が新たに発見されることが間違いない。近年では、昭和61年、長田の横尾城跡の調査中に卜部吉博氏が発見された「横尾城古墳」円墳二基があり、平成7年、戸河内袖ノ木の「（仮称）大フケ古墳」円墳二基の発見がある。いずれも踏査のみで詳細は不明である。

さらには、羽須美村文化財審議委員でもある日高亘氏の城館調査の成果がある。





**SR01 (第24・25・26図) (図版9b.)**

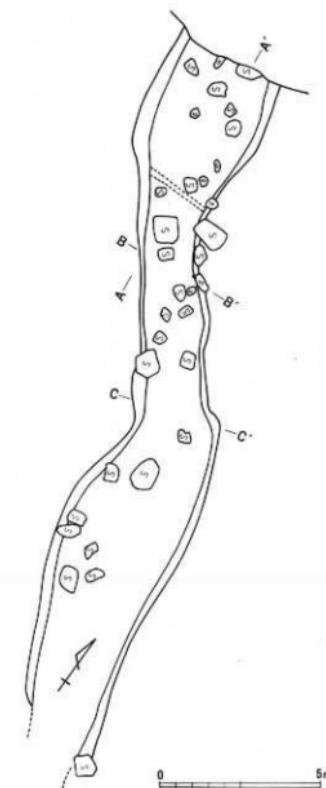
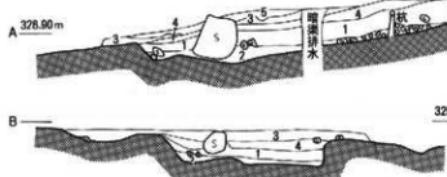
位置 調査区北D-1区から、南南東に向かって延びF-5区でSR02と合流する旧谷川跡である。川底の標高約329.36m~324.0mを測る。

形状 残存する地山の形状しかわからず、旧谷川が水を湛えていた頃の状態は正確にはつかめない。地山の上場から、川幅およそ約4m~1.5mを測る。川の中にはD-2-E-2を中心約50cm程の石がころがり、幅1mに達する岩石もある。それらは、地山に残る川の深さよりも厚く、つまり地山の上場から顔を覗かせていた。また、これらの岩石は地山から浮いており、後述するSR02の遺物28-1が岩石の下敷きになって出土していることからもわかるとおり、1層が堆積する際に流れ込んだものと思われ、かなりの雨量に伴った土砂崩れのようなものが旧谷川を襲ったものと考えられる。

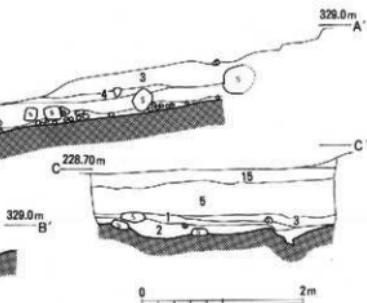
覆土 まず、黒墨色砂質土(1層)が堆積し、続いて黒墨色土(3層)が堆積する。砂礫I(2層)の礫(石)は、当然川底にあったものであろうが、2・4層は基本的に1・3層の砂質化と考えている。旧谷川中の岩石は、前述どおり1層堆積時のものであり、おおむねこの堆積によってSR01はその姿を消す。

遺物 1層及び1層と2層の境目から遺物26-1・26-4・26-8・26-9等が出土し、3層から26-5・26-11等、4層からも出土がある。摩滅もひどく、上流から流されて来たことに間違いない。(図版13d, e.)

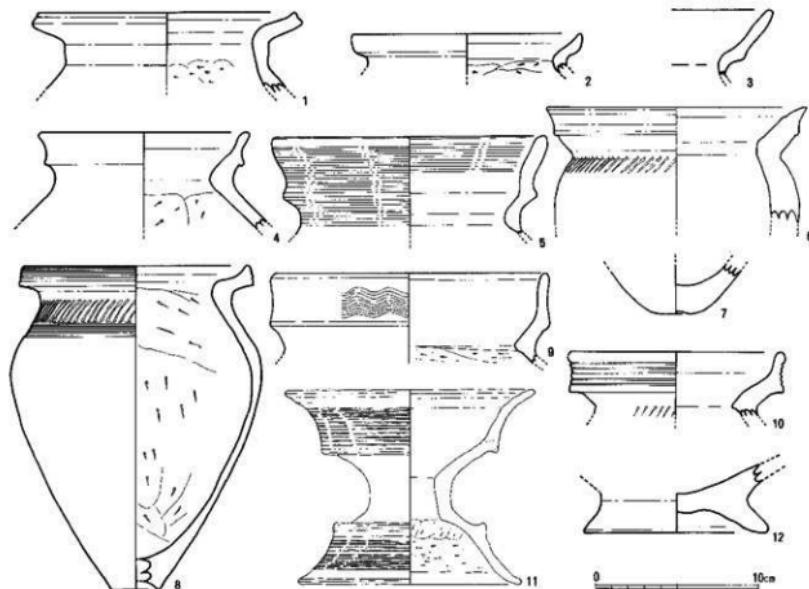
1層 黒墨色砂質土	4層 砂礫II
2層 砂礫I	5層 黒色土
3層 黑墨色土	15層 灰褐色層(鉛盤)



第24図 菅城遺跡 SR01 平面図 (1:150)



第25図 菅城遺跡 SR01断面図 (1:60)



第26図 菅城遺跡 SR01-SR04 出土遺物実測図 (1:3)

第26図 菅城遺跡 SR 01・SR 04 出土遺物観察表

26回	器種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面 有無	胎 土	内			外		外被 層	時期	調査区
							口縁部外側	口縁部内面	内面周部以下	外被層-骨層	内面			
1	弥生 甕	16	/	4.8	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む；粗	ナテ	ナテ	ヘラケズリ	ナテ	淡黄褐色	/	後期	D-2
2	弥生土器 甕	14.2	/	2.5	不良	2mm以下の砂粒を多量に含む；粗	ナテ	ナテ	ヘラケズリ	ナテ	淡黄褐色 褐灰	/	後期	D-2
3	弥生土器 甕	/	/	4	良	2mm以下の砂粒を微量に含む；粗	ハケメ	ナテ	ヘラケズリ	/	黒褐色 灰黃	/	後期	D-2
4	弥生土器 甕又は壺	13.1	/	6	良	2mm以下の砂粒を多量に含む；粗	圓柱ナテ	圓柱ナテ	ヘラケズリ	ナテ	鈍い黃褐色	有	後期	D-2
5	弥生土器 甕	16.8	/	6.2	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む；粗	ハケメ	ナテ・ハケメ	ヘラケズリ	ハケメ・ナテ	淡黃褐色	/	後期	EW-H-1 D-2
6	弥生土器 甕	16	/	7.4	不良	3mm以下の砂粒を微量に含む；粗	圓柱ナテ	圓柱ナテ	ヘラケズリ	刺突(例)文	淡黃褐色	/	後期	D-2
7	26-6の底部	/	1.7	3.1	不良	2mm以下の砂粒を微量に含む；粗	底の凹状な直径1.7cmの底部は1.5mmでいる。	ナテ	ナテ	ケズリ	淡黄褐色 神-青褐色	/	後期	D-2
8	弥生土器 甕	14	3	20.1	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	4条の筋状溝	圓柱ナテ	ヘラケズリ	刺突(例)文 +4条筋溝(例) +3カキ	淡黄褐色 神-青褐色	有	後期	D-2
9	弥生土器 甕	16.7	/	5.6	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む；粗	3条筋状の溝	ナテ	ヘラケズリ	圓柱ナテ 波状文?	暗赤褐色 淡黄褐色	有	後期	E-2
10	弥生土器 甕	13.2	/	4	不良	2mm以下の砂粒を含む	5条の筋状溝	圓柱ナテ	ヘラケズリ	ナテ・刺突 (例)文	鈍い黃褐色	/	後期	D-2
11	弥生 漆器部分	15.2	13.6	2.5	良好	2mm以下の砂粒を含む	口縁部：外周10枚以上の縦凹溝、内面へラミガタ。 脚部：外周11条以上の縦凹溝、内面へラケズリ。	ナテ	ナテ	ナテ	淡茶褐色	/	後期	E-2
12	SR04 弥生 の底部	10.2	4.2	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む；粗	古付型または漆の底漆。古漆の外層は黒褐色方に、底部外周は横方向に筋ナテ。内面にはケズリは無く、「寒なナテ」。						中期	EW-H-1 D-2	

## SR 04 (第3・26図)(図版11b, c.)

**位置と形状** 調査区北C-1区から調査区南A-5区に向かう流れと、B-2区から南に向かいB-3区で前者と合流する、二本から成る旧谷川跡でありSR 01・02の関係と似ている。

SR 04は、第3章及び本章(基本層序)でも触れているとおり、平成5年の試掘調査トレンチW-F-2・3でその一部を確認したので、今回地表面での精査でアウトラインを出し、再度トレンチT-A~Cで調査したものである。しかし出土遺物が無に等しかったこともある、それ以上の調査を行わなかった。よってSR 04として一括した。

**遺物** 試掘時出土の遺物26-12。

## SR 02 (第23・27・28図)(図版10b, 11a, 13f, 14a, b, c.)

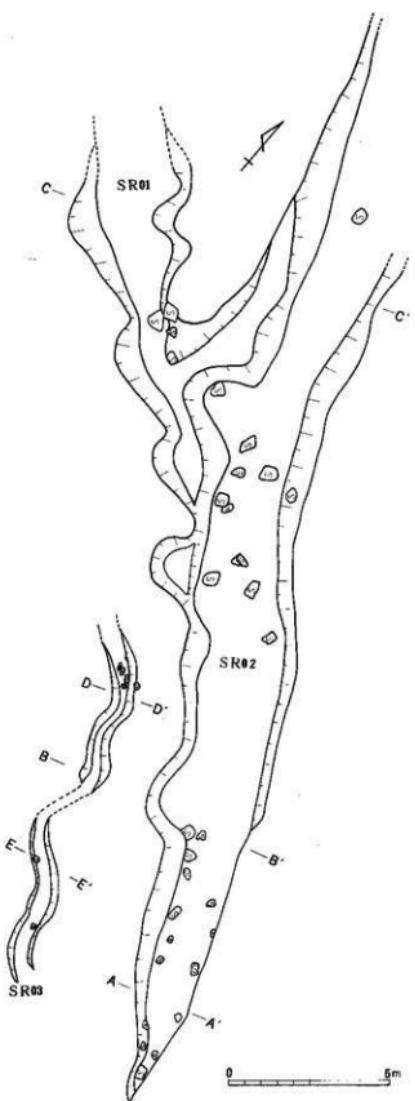
**位置** 調査区北F-2区から現れ、調査区南G-6区で調査区外となる旧谷川跡で、F-5区でSR 01と合流するものである。川底の標高は、F-2区最北約326.30mからG-6区(第23・27図A-A')で約320.45mを測る。

**形状** 残存する地山の状態から、川幅は最大約4mである。

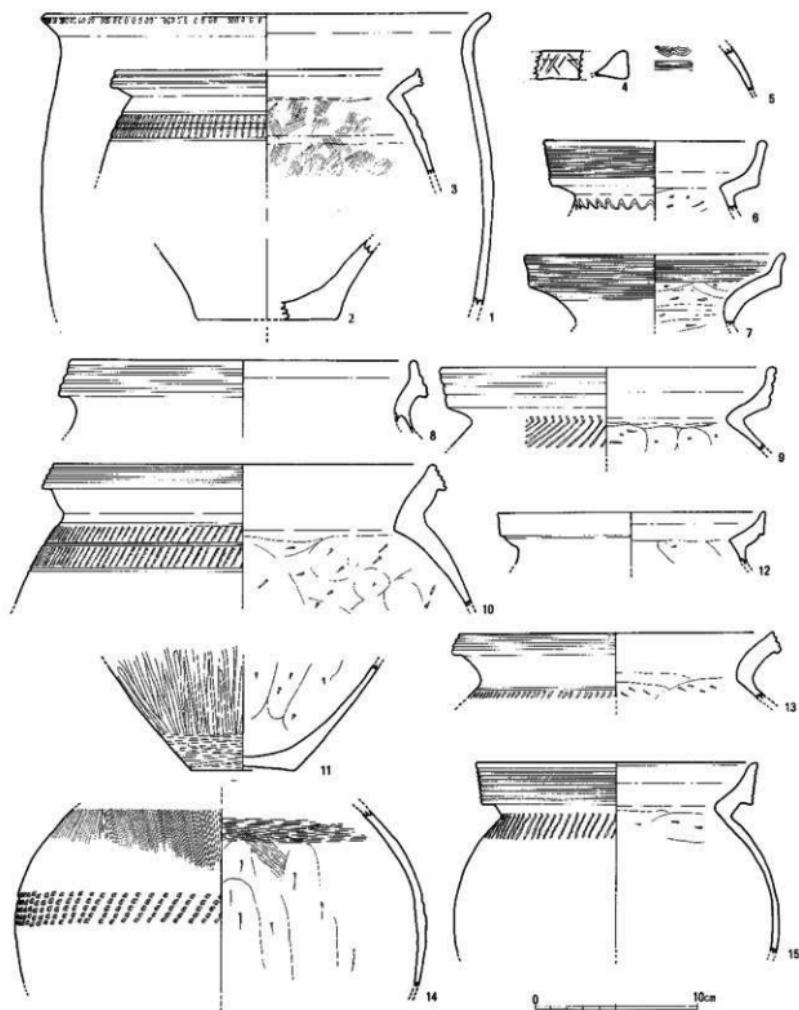
**覆土** 5層の堆積により、その機能を完全に失っている。

**遺物**

1層と2層の境目から、弥生中期前葉頃と思われる遺物28-1・2 瓢が、後から流されて米た石に押しつぶされた形で出土したが、同層から弥生中期後



第27図 萩城遺跡 SR02-SR03 平面図 (1:150)



第28図 蒼城遺跡 SR02 出土遺物実測図 (1:3)

葉の（広島県）塩町式の甕28-3や、後期の甕28-15等も出土した。また、1と15には煤が外面全体にびっしり付着していた。おそらく、時期差のあるこれらの土器は、弥生時代後期頃1層が流れ込む際、中期の遺物を包含する土層を浸食し、混ざり合って流れ込んだと思われる。28-4は中期広口甕

第28図 菅城遺跡 S R 0 2 出土遺物観察表

28回	器種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	土器表面 既存状態	胎土	調査		整備		色調	外面 底面	時間	調査区	
							口縁部外面	口縁部内面	内部裏面以下	外表面	内面				
1	先生上器 蓋	27.5	/	18.3	焼成良好	2mm以下の砂粒を微量に含む: 密	単純口縁、口唇部刻印	丁寧なナゲ	ハケメ?	不明	灰褐色	有	中期前段	G-5	
2	28-1の底部	/	8.6	4.9	焼成良好	2mm以下の砂粒を微量に含む: 密	底部: 同前共に窄なナゲ、内面、腹部にかけ保				純い褐色	有?	中期前段	G-5	
3	先生上器 蓋	19	/	6.5	焼成良好	1mm以下の砂粒を微量に含む: 密	2条の回線	回転ナゲ	ハケメ	3条の回線文と刺突文の組合せ	褐色	無	中期後段	G-6	
4	先生 広口壺	/	/	1.8	不良	1mm以下の砂粒を含む: 密	斜格子文	回転ナゲ	/		純い褐色	/	中期後段	G-5	
5	先生 蓋のみ	/	/	2.7	良好	2mm以下の砂粒を含む	/	/	ヘラケズリ	波状文と直線文	灰白色	褐色	無	後期	G-3
6	先生上器 蓋	13.8	/	4.2	良	3mm以下の砂粒を多量に含む: 相	圓状工芸による 沈殿文	回転ナゲ	ヘラケズリ	波状文	褐色	純い褐色	有	後期	不明
7	先生上器 蓋	15.8	/	4.2	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む: 相	ハケメ	ナゲ? ハケメ	/	ナゲ?	褐色	純い褐色	有	後期	不明
8	先生上器 蓋	21.4	/	4.3	良好	2mm以下の砂粒を含む	4条の回線	回転ナゲ	/	回転ナゲ	浅い褐色	/	後期	F-3	
9	先生上器 蓋	20.8	/	5	良好	2mm以下の砂粒を多量に含む	3条の回線	回転ナゲ	ヘラケズリ	刺突(列)文	灰白色	灰褐色	/	後期	G-6
10	先生上器 蓋	23.5	/	8.9	焼成良好	3mm以下の砂粒を多量に含む: 相	4条の回線文	ナゲ	ヘラケズリ	刺突(列)文	褐色	純い褐色	/	後期前段	F-3
11	28-10の底部	/	6.4	6.7	焼成良好	4mm以下の砂粒を多量に含む: 密	底部: 外周縁方向と横方向による1重なヘラケズリ。				純い褐色	有	後期前段	F-3	
12	先生上器 蓋	16.6	/	3.3	焼成良好	3mm以下の砂粒を含む	回転ナゲ	回転ナゲ	ヘラケズリ	回転ナゲ?	褐色	純い褐色	有	後期	F-4
13	先生上器 蓋?	19.3	/	4	焼成良好	2mm以下の砂粒を少量に含む	3条の回線文	回転ナゲ	ヘラケズリ(列点)文の組合せ		内面裏面と刺突(列点)文の組合せ	浅い褐色	有	後期	F-3
14	先生上器 蓋?	/	/	11	良	1mm以下の砂粒を含む: 密	腹部: 内面、ヘラケズリ、ハケメ。外面、ハケメ。				純い褐色	有	後期?	G-5	
15	先生上器 蓋	17.8	/	11.9	焼成良好	2mm以下の砂粒を含む: 密	沈殿文	回転ナゲ	丁寧なヘラケズリ	刺突文+ナゲスリスはケズリ	メはミガキ?	純い褐色	有	後期	G-5

の口縁端部細片。また、3層上層出土の28-10・11(図版14b.)及び13は塩町式の影響を残している後期の型であり、3条の回線で区画された中に刺突文様を施している。底部外面はミガキが上方(胴部)に向かって、最下部は横方向に入っている。内面頸部以下はヘラケズリである。石見V-1様式<sup>13)</sup>と考えられる。

#### S R 0 3 (第27・28・30回)(図版10a.)

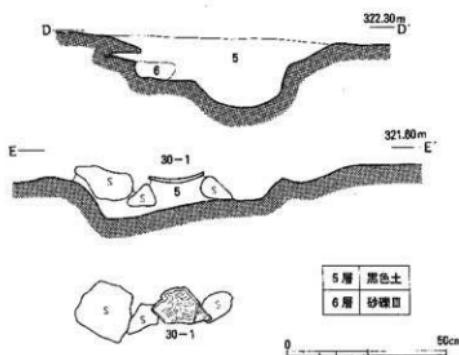
位置 調査区東南G-6区で確認したものである。F-5区方面からG-7東へ、S R 0 2 と沿うように流れている。

形状 地山に残された残存状態は、長さ約12m川幅約90cmと他のS R に比べ規模も小さく、川と言ふより溝の様相を呈しているが、自然のものと判断した。

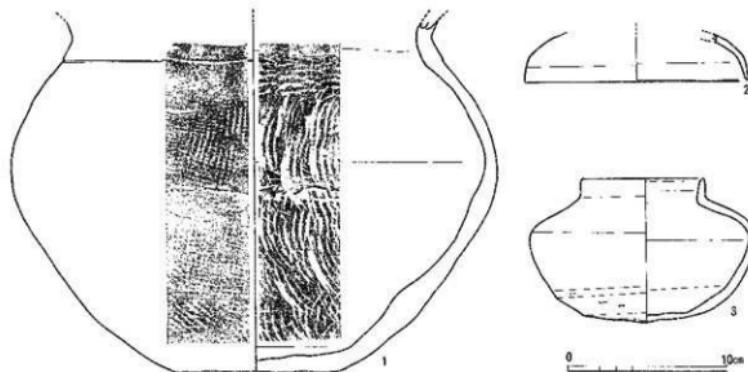
覆土 5層及び、5層の砂質化した6層によってその機能を失っている。

遺物 遺物30-1は軟質の須恵器甕で、昭和47年出土のものと同一固体であった(図版14d.)。30-2・3は平成5年の試掘時にトレーナーW-L-1から出土、3は有蓋短頸壺の完成品。2は当初3の蓋と考えていたが、焼成・復元径から別々のものと判断した。

**第31図** 旧谷川跡は地山面での精査で輪郭を出し、そのレベル以下の出土遺物をSR出土して扱つたため、同じ5層であってもSR出土と、単なる流れ込み遺物扱いとなってしまったものができた。いずれにせよ流れ込んだ遺物ではある。第31図は、弥生中期中葉の壺である遺物31-3（図版14f.）



第29図 菖城遺跡 SR03 断面図・遺物出土状況図 (1:15)



第30図 菖城遺跡 SR03 出土遺物実測図 (1:3)

第30図 菖城遺跡 SR03 出土遺物観察表

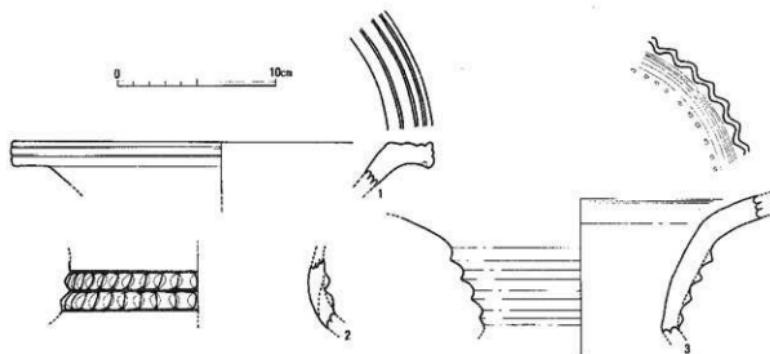
番号	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	焼成	胎土	測定 参考	色調	時期	調査区
1	須恵器 壺	/	10	/	21.8	やや不良	2mm以下の砂粒を少量含む 外曲：頸部に1条の凹 底：無	内面：褐色青褐色 底：褐色	灰	?
2	須恵器 壺	14	/	/	3.6	良好	2mm以下の砂粒を含む の蓋とちぎれたが、底丸く接着しなかった。	外底：褐色 内面：白色	6c後～ 7c初頭	試W-L-1 G 6
3	須恵 壺	7.6	8	9	/	良好	3mm以下の砂粒を含む 口縁部向軸ナメ。試焼時に出土、当時は30-3 の蓋とちぎれたが、底丸く接着しなかった。 口縁部直下。外底：白色 内面：白色	内面：褐色 底：褐色	6c後～ 7c初頭	試W-L-1 G 6

## 第4章 遺構と遺物

第31図の弥生時代中期の遺物が5層からも出土していることから、幾度の水害によって遺跡上方から流れしてきたものと考えられる。1は口縁端部内面（天井面）に3条、外面に2条の凹線文が施されている。2は試掘調査時に出土したもので、頸部に2条の指頭平底文を持つものである。1・2は残存状態が悪い。3は頸部から口縁部にかけてのものであり、口縁端部は失われている。頸部に4条以上の突帯文を持ち、口縁部内面（天井面）に櫛描による波状文、沈線文・刺突文をあしらっている。

**[第32図]** S R 0 1を覆い、完全に過去のものとした3層からの流れ込みによる遺物であり、複合口縁を持ち、内面頸部以下にヘラケズリを施す弥生時代後期のものである。3層以下の土層からは弥生時代以降の遺物を含まないため、3層は弥生後期の堆積と判明した。

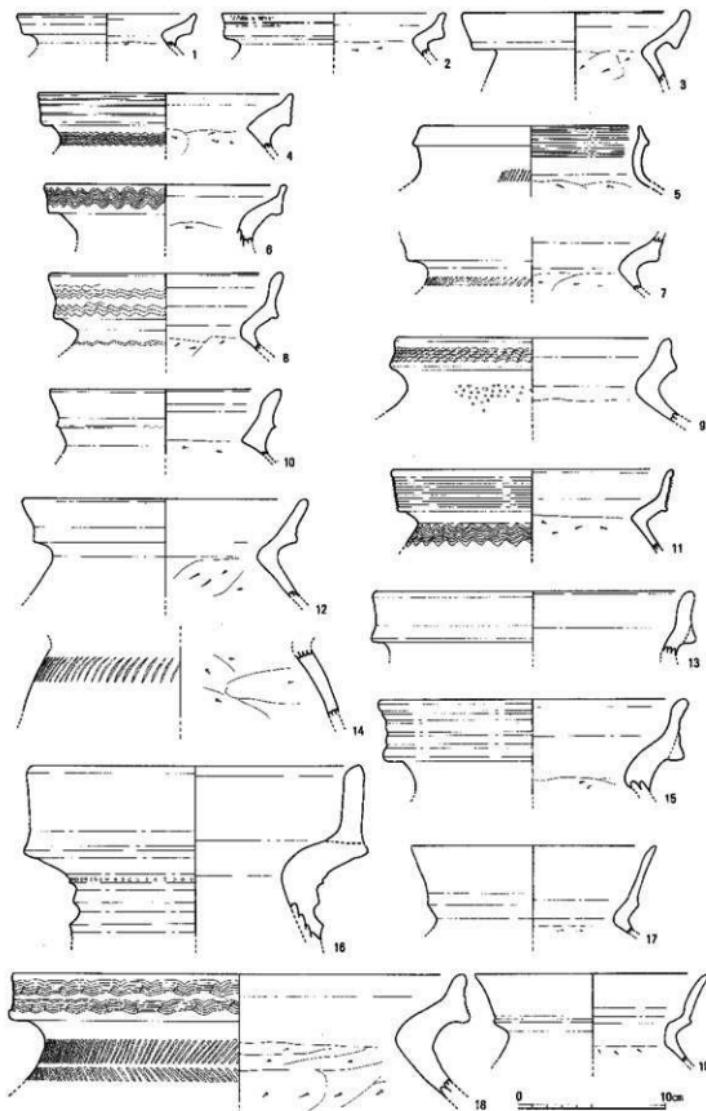
2は口縁外部にかすかに沈線が確認できる。5は壺であり、内外面共にハケメ調整が施され、内面頸部以下はケズリである。頸部外面にはヘラ状工具による刺突文がみられる[1]。石見V-1様式と思われる[13]。4・6・8・11・18には口縁部外面や片部（頸部）に、櫛状工具による直線文や波状文がみられる。8は口縁部がやや肥厚している。これらは石見V-3様式と考えられる。16は複合口縁の壺であるが、頸部に刺突文と突帯文を持っている（図版15a,）。器厚最大約2.5cmを測る。18は口縁部外面に櫛描扁廉状文？を施し、肩部に綾杉状に刺突（列点）文を施した壺である（図版15b,）。17・19は後期終末期の甕である。17の口縁端部が尖っているのに対し19は端部をやや扁平に調整している。石見V-4様式に対応する。



第31図 菅城遺跡 流れ込み遺物実測図 (1:3)

第31図 菅城遺跡流れ込み遺物観察表

3114	器種	口径 cm	株高 cm	土厚 cm	地 上	測			色 調	時 期	調査区
						山縁部外面	山縁部内面	内面頸部以下 外面頸部～片部			
1	弥生土器：広口壺	26.6	2.8	小鉢	1m以下：砂粒を含む：密	2条の凹線文	3条の凹線文	/	ナデ？	浅い黄	小野中葉 C-5
2	弥生土器：壺	/	4.3	不良	1m以下：砂粒を含む：密	/	/	/	ナデ	頭部2条の指 頭部刺突文	試W-H 3 C 5
3	弥生土器：広口壺	/	8.6	良好	1m以下：砂粒を含む：密	/	波状・沈線・刺突	ナデ	頭部4条以上 の突帯文	純い黄	小野中葉 G-3



第32図 萩城遺跡 流れ込み遺物実測図 (1:3)

## 第4章 遺構と遺物

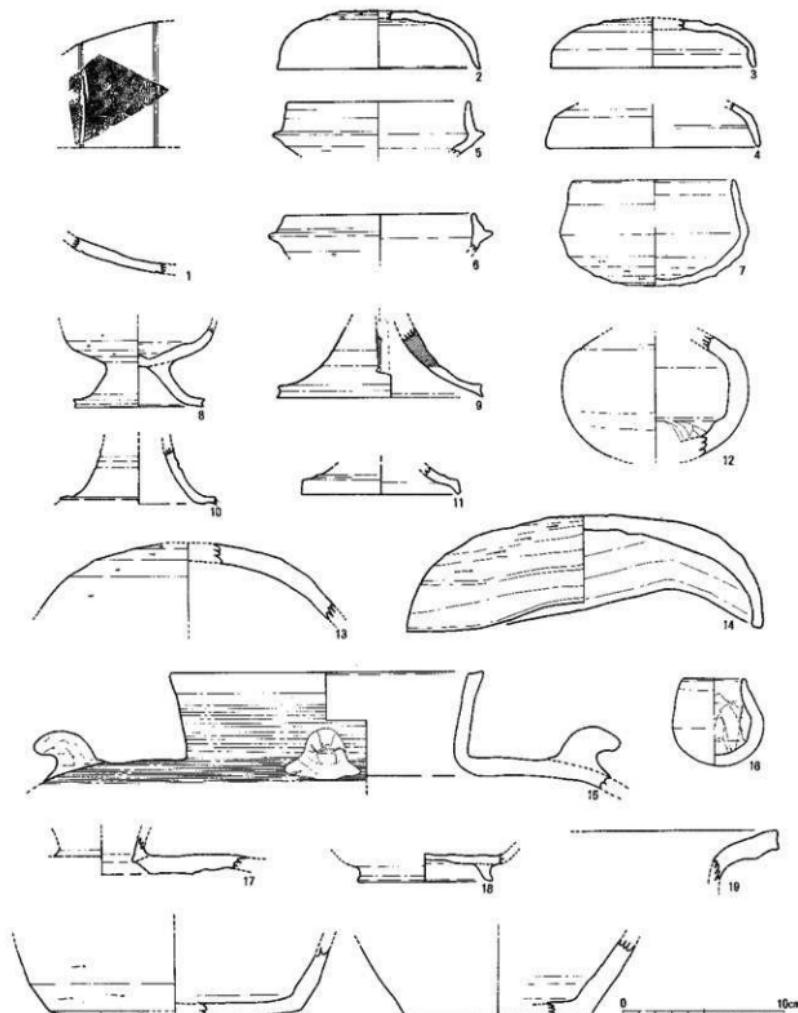
第32図 菩提遺跡流れ込み遺物観察表

32回	器種	口径 cm	残高 cm	土壌面 現存状態	特上	表面		裏		色調	外表面	時期	調査区	
						口縁部外側	口縁部内側	内面部以下	外面部一部	外側	内側			
1	舟生土器 甕	12	2.2	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む:根	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	純・黄緑	灰	/	後期	E-2
2	舟生土器 甕	15.3	2.5	不良	2mm以下の砂粒を含む	沈底文?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅い黄緑	灰	/	後期	F-4
3	舟生土器 甕	15.2	4.5	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む:根	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	純い黄	灰	/	後期	E-2
4	舟生土器 甕	17.5	3.7	良好	2.5mm以下の砂粒を含む	3条の凹線文?	ヨコナデ	ヘラケズリ	波状文	純・黄緑	灰黒	/	後期	E-3
5	舟生土器 甕	14.8	4.4	良好	3mm以下の砂粒を含む	ハケメ	ハケメ・ヨコナデ?	ヘラケズリ	刺突(例点)文	灰灰	灰黒	有	後期	C-5
6	舟生土器 甕?	18.4	4	良好	2mm以下の砂粒を含む	波状文	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	純・黄緑	灰白	有	後期	F-5
7	舟生土器 甕	/	3.2	良好	3mm以下の砂粒を含む	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	刺突(例点)文	純・黄緑	灰黒	/	後期	F-5
8	舟生土器 甕	13.9	5.5	良好	2mm以下の砂粒を含む	波状文	ヨコナデ	ヘラケズリ	波状文	純い黄緑	灰	/	後期	E-3
9	舟生土器 甕	18.2	5.7	不良	3mm以下の砂粒を箇量含む:根	波状文	不明	ヘラケズリ	不規則な刺突文(例点)	灰黒	浅い黄	/	後期	E-2
10	舟生土器 甕	15.6	4.5	不良	5mm程度の砂粒を多量に含む:根	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	純い黄	灰	/	後期	E-2
11	舟生土器 甕	19	5.3	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	梅接溝線文	ヨコナデ	ヘラケズリ	波状文	純い黄緑	灰	/	後期	G-7
12	舟生土器 甕	19	6.6	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む	/	/	ヘラケズリ	/	浅い黄緑+純い黄	灰	/	後期	F-5
13	舟生土器 甕	21.5	4.5	不良	2mm以下の砂粒を多量に含む	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	純い黄	浅い黄	/	後期	R-2
14	舟生土器 甕	/	4.8	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	/	/	ヘラケズリ	刺突(例点)文	浅い黄	灰	/	後期	F-5
15	舟生土器 甕	20.7	6.5	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む	4条の凹線文	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅い黄緑	灰	/	後期	E-3
16	舟生土器 甕	22.4	11.9	不良	3mm以下の砂粒を多量に含む:根	ヨコナデ?	ヨコナデ	/	3条以上凹線文+刺突	純・黄緑	灰黒	/	後期	R-4
17	舟生土器 甕	16.6	6	不良	1mm以下の砂粒を少量含む:根	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅い黄緑	灰	/	後期終末	R-2
18	舟生土器 甕	30.8	8.5	良好	3mm以下の砂粒を多量に含む:根	2条の櫛縞用 波状文?	ヨコナデ	ミガキ+ヘラケズリ	波状文+刺突 (例点)文	灰灰	灰黒	/	後期	F-3
19	舟生土器 甕	16	6	良好	1mm以下の砂粒を少量含む:根	ヨコナデ?	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黒	灰	/	後期終末	E-2

第33図 須忠器は5層から13層に含まれたが、9層以降は中世の客土に混入したものと思われ、細片であった。本図の須忠器は5層からのものである。遺物1は樽型底の可能性を考えているものである(図版15c.)。2・3・4は坏蓋で、4は大谷編年出雲5期か。2は7に焼成が酷似する。5は蓋坏で出雲2期後半のもの。6も蓋坏であるが出雲4期か。7は鉢。遺物12-1と同製品で、6世紀末~7世紀初頭と思われる(図版15d.)。8は低脚無蓋高杯で透かしの無いもの、出雲5~6期と考えられる。9は、おそらく長脚無蓋高杯の脚端部で出雲5期。12が、蓋の体部であれば出雲4期末~6期初か。器厚が1.4cmもある。14は昭和47年出土。おそらく15のような蓋の蓋として製作されたものと思われるが、全体に大きく歪んでいるものの、内面に磨耗痕は認められない。口径約23cm、器厚最大約1.6cmを測る。山本編年III期と共通性が認められる(図版15e.)。15は縫状把手を持つ甕。肩部が張っている(図版15f.)。16は小型丸底甕(堆)であるが、口縁端部が発達していない(図版16a.)。17は

平瓶。把手は無く、体部上面が扁平であることから、体部は台形状を呈すものであろう。18は輪高台を持つ壺、または环・碗の底部である。19は、甕の口縁部、21・22は壺の底部と思われる。

以上、流れ込みによる須恵器の大半は、造構（S B）等の時期と重なる6世紀末～7世紀前半のも



第33図 菅城遺跡 流れ込み遺物実測図 (1:3)

## 第4章 遺構と遺物

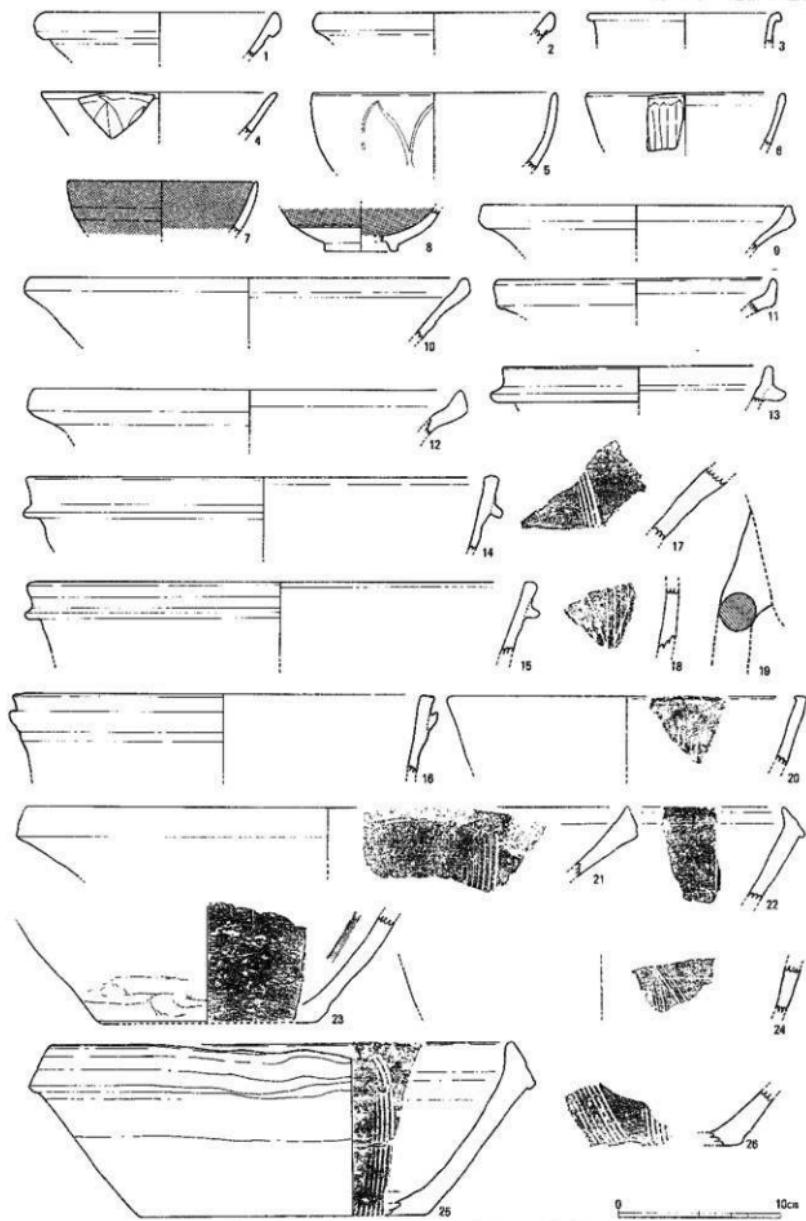
第33図 菅城遺跡流れ込み遺物観察表

338	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残高 cm	焼成 度	検上	測量等		色調	時期	調査員	
								外曲	内曲				
1	須恵器 横型碗	/	/	/	5.8	良好	砂粒は認められない：密	外曲：1~2条の比較で区画された中に3段の波状。内曲：ナチュラル。	青みの灰	施華編年I形式且投擲	S 47年 出土	山本	
2	須恵器 环蓋	12.4	/	/	3.2	良好	む：密	2mm以下の砂粒を微量含む：密	外曲：口部底部凹弧ナチュラル。天井部凹弧へラケズリ。内曲：回転ナチュラル。	灰白~灰	6世紀後半~7世紀前半	E-2社	
3	須恵器 环蓋	12.7	/	/	3	良好	む：密	3mm以下の砂粒を少含む：密	外曲：口部底部凹弧ナチュラル。天井部凹弧へラケズリ。内曲：回転ナチュラル。	灰	断面赤褐色	6世紀後半~7世紀前半	E-3社
4	須恵器 环蓋	13	/	/	2.7	良好	む：密	0.5mm以下の砂粒微量含む：密	外曲：山井部凹弧ナチュラル。天井部凹弧へラケズリ。内曲：回転ナチュラル。	灰	6世紀後半~7世紀前半	F-6	
5	須恵器 直环	11.2	/	/	3.4	良好	3mm1~0.5mm以下砂粒含む：密	回転ナチュラル。外曲底部凹弧へラケズリ。	青みの灰	施華編年II形式	6世紀後半~7世紀前半	F-3	
6	須恵器 环杯	11.4	/	/	2.4	良	2mm以下の砂粒を少含む：密	回転ナチュラル。外曲底部凹弧へラケズリ。	灰白	6世紀後半~7世紀前半	D-4		
7	須恵器 筒	10	5.4?	6.6	/	良好	3mm以下の砂粒を少含む：密	回転ナチュラル。外曲底部凹弧へラケズリ。一部に自然釉とクリッキ有り。	灰白~灰	6世紀後半~7世紀前半	E-1社		
8	須恵器 亂形直高環	/	8	/	5	良好	2mm以下の砂粒を微量含む：密	回転ナチュラル。底部同軸へラケズリ。脚部取付け後、接合部ナチュラル。難辨に釉。	灰	7世紀前半	C-5		
9	須恵器 高杯	/	12.8	/	4.4	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	脚部：外曲回転ナチュラル。2条沈泡。内面回転ナチュラル。砂粒の開き2万粒の通り。	灰	7世紀前半	C-5		
10	須恵器 高杯	/	約10	/	3.6	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	脚部：外曲回転ナチュラル。2条沈泡。内面回転ナチュラル。一部に自然釉。	灰	7世紀前半	D-5		
11	須恵器 高杯	/	9.6	/	1.7	良好	0.5mm以下の砂粒を微量含む：密	脚部：外曲回転ナチュラル。脚端部の上に1条の旋。内面回転ナチュラル。	灰	7世紀前半	F-5		
12	須恵器 週足は金	■	脚部：11.5 外径：11.5	/	7.4	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	外曲：ヘラケズリ後？ナチュラル。片岸1条沈泡。内面：ナチュラル。	灰	6世紀後半~7世紀前半	F-5		
13	須恵器 壺・直	/	/	/	4.8	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	外曲：回転ヘラケズリ。内面：ナチュラル。壁厚最大1.4cm。	灰	6世紀後半~7世紀前半	G-7		
14	須恵器 壺・直?	17~18	/	7.3	/	良好	3mm以下の砂粒含む	外曲：口縁部ナチュラル。裏焼痕？。腹（沈泡）を施し上半部へラケズリ。内面：ナチュラル。脚部を焼成前に修理した所。第大、壁厚最大1.6cm。	灰	S 47年 G-6			
15	須恵器 壺	19.3	/	/	6.7	良好	3mm以下の砂粒を多く含む	外曲：口縫部ナチュラル。脚部カヨ目。印昨日。横状把手3ヶ所。内面脚部凹弧ナチュラル。以下骨質波波。	青みの灰	6世紀後半~7世紀前半	E-3 F-3		
16	土師器 小形丸 直	3.7	?	3.4	/	良好	3mm以下の砂粒を含む	手くねくね（埋）外曲：信ナチュラル。内面：側面板。	淡黄褐		B-3		
17	須恵器 平瓶	基部底 15.9	/	2.3	良好	2mm以下の砂粒含む：密	回転ヘラケズリ。蓋部を付けナチュラル。内面：粗訛。結合部ナチュラル。体部調整済？信W。把手無。底部が底部の中心線をなしていいる。	灰白		C-3			
18	須恵器 壺・环?	/	8.5	/	1.8	良好	2mm以下の砂粒を含む：密	外曲（底部）回転ヘラケズリ後。付け高台（輪扁）底白。内面：ナチュラル。	灰	須絆：8世紀~9世紀 灰暗	B-4 B-4		
19	須恵器 壺	/	/	/	3.1	良好	2mm以下の砂粒を含む：やや粗	堆存部凹弧ナチュラル。基部最大1.5cm。	灰		C-2		
20	須恵器 壺・金?	/	15.4	/	4.4	良	2mm以下の砂粒を含む：密	外曲：体部、底面凹弧へラケズリ。内面：回転ナチュラル。	灰白	8世紀~9世紀	E-6 G-6		
21	須恵器 壺・金?	/	11.6	/	4.8	良好	2mm以下の砂粒を少含む：密	外曲：体部ナチュラル。難辨。底部工事なナチュラル。回転ナチュラル。	灰白、体部は灰	8世紀~9世紀	G-5		

のであるが、1が陶邑編年I型式2段階のものであれば、邑智群内でこの段階の須恵器は4ヵ所で発見されているに過ぎない1るものや、また17~18等、およそ7世紀末から9世紀代も微量出土した。

第34図 5層ないし8層から14層にかけ、12世紀から16世紀の出土遺物があった。しかし、第3章で断ったとおり、流れ込みによる遺物であることと、調査員の未熟さから色調の近い堆積土の平面上での分層ができず一括して取り上げる結果となってしまったため、層別の遺物観察ができなかった。

遺物は34-1・2・3は白磁器（中国製）で、1・2は玉緑の碗、3は壺の口縁部である。遺物34-4・5・6は、中国浙江省龍泉窯製の青磁器であり、蓮弁文碗である。（図版16b.）

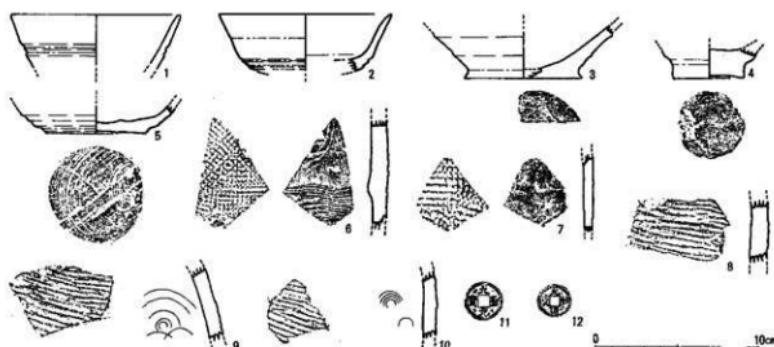


第34図 蒼城遺跡 流れ込み遺物実測図 (1:3)

第34図 菅城遺跡流れ込み出土遺物観察表

3474	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残 色調(釉料)・使用痕・調整・焼成等	考		製作地・製作年代	調査区
						太宰府 式:陶XIV期	淡灰白色釉 太宰府 式:陶XIV期	太宰府 式:陶XIV期	
1	磁器	白磁碗	/	/	2.9 玉神の御器	太宰府 式:陶XIV期	淡灰白色釉 太宰府 式:陶XIV期	江南地方:北宋後~南宋:11世紀中葉~12世紀前葉	E-6
2	磁器	白磁碗	/	/	1.7 玉神の御器	太宰府 式:陶XIV期	淡灰绿色釉 太宰府 式:陶XIV期	江南地方:北宋後~南宋:11世紀中葉~12世紀前葉	不列
3	磁器	白磁碗	11.8	/	2 玉神の御器	淡灰白色釉	カセ:有 中國製		C-6
4	磁器	青磁碗	14.6	/	2.6 片切形 幾何文陶	(薄青色)粉青色釉?	眞人:無 (民窯) 雜東室	南宋~元 12世紀中葉~13世紀前葉	E-2
5	磁器	青磁碗	15	/	4.9 片切形 幾何文陶	(薄青色)粉青色釉?	眞人:無 (民窯) 雜東室	元~明 14世紀中葉~15世紀前葉	B-6
6	磁器	青磁碗	12	/	3.4 楊(細) 接脚弁文陶	唐いオリーブ色釉	眞人:有 (民窯) 亂泉室	明 15世紀後半~16世紀	E-6
7	陶器	黑釉碗	11.8	/	3.3 天目茶碗	黑釉・口縁部アメ釉	口縁下が一段凹んでない 素地:密で、素地が良い。中国製?	ME E-6	
8	陶器	黑釉碗	/	4.7	2.7 天目茶碗	黒釉は1mmに溝がないが、見込みと釉垂れ部が厚い。特に内側の脚、断面に小さい気泡が多い。色は黒茶の様		C-6	
9	中世須恵器	片口 (こね)鉢	19.6	/	2.8 片口部:無 焼成:不良 色調:灰	東播系	日程Ⅱ段階	難合 12世紀中葉~13世紀後半	F-6
10	中世須恵器	片口 (こね)鉢	27.2	/	3.9 片口部:無 焼成:良好 色調:灰。口縁部外面:緋	東播系	日程Ⅱ段階	難合 12世紀中葉~13世紀後半	E-2
11	中世須恵器	片口 (こね)鉢	17	/	2.1 片口部:無 焼成:不良 緋:口縁部外面:緋	東播系	日程Ⅱ段階	難合 12世紀中葉~13世紀後半	C-7
12	中世須恵器	片口 (こね)鉢	26.6	/	2.8 片口部:無 焼成:良好 緋:口縁部外面:緋	東播系	日程Ⅱ段階	難合 12世紀中葉~13世紀後半	D-6
13	土師質(瓦 質?) 土器	土器	16	/	2.2 瓦質焼成:焼成:良好 外面:緋色。内面:灰色・調整外観:回転ナデ 内面:丁寧なナデ	難合~ 直町?	中世	D-2	
14	土師質土器	土器	29.2	/	4.7 色面外観:器の為不明。内面:細い脚、焼成:良好・胎土:密1mm以下 特徴微弱化、直面内面:丁寧なナデ	難合?	中世	F-5	
15	土師質土器	土器	31.2	/	4.6 色面外観:器の為不明。内面:細い脚、焼成:良好・胎土:密1mm以下 特徴微弱化、直面内面:回転ナデ	難合?	中世	F-5	
16	土師質土器	土器	26	/	5 色面外観:器、内面:上部:灰、下部:黒、焼成:良好・胎土:密1mm以下 特徴微弱化、直面内面:指ナデ	難合?	中世	F-3	
17	陶器(せっ 器)	備前焼鉢	/	/	4.6 色調:枯黃・青褐色、燒成:良好、胎土:1.0~0.3mm多孔。調整:内面ヨコナデ内面摩擦2条の横目	備前Ⅱ期後半~中期	13世紀後半~14世紀	B-5	
18	土師質? 中世須恵器	擂鉢	/	/	3.9 色調:外表面:黄褐色、内面灰褐色。焼成:不良。胎土:密2mm砂粒微量含む。調整:内面ヨコナデ? 内面摩擦? 4条以上の横目	中世	F-3		
19	土師質土器	足付土器 (鉢)	/	/	7.6 頸部と脚部の接合部分:山口式系 色調:純一様、全面に煤付焼成:良好。胎土:粗4mm大砂粒含む。調整:内面ヨコナデ? 内面摩擦?	難合 12世紀~13世紀後半	E-6		
20	土師質? 中世須恵器	擂鉢	22.4	/	4.4 色調:灰黒。焼成:不良。胎土:密、1mm砂粒微量含む。調整:内面ヨコナデ? 内面摩擦、5条以上の横目		中世	E-5	
21	陶器(鋸鉢)	備前焼鉢	37.2	/	4.5 色調:肉桂赤、焼成:良好。胎土:灰、調整:内面ヨコナデ。内面素地の横目	備前Ⅳ期前半	宋町 15世紀前半	G-6	
22	陶器(鋸鉢)	備前焼鉢	/	/	5.9 色調:外表面緑の灰、内面灰。焼成:良好。胎土:灰、調整:内面ヨコナデ。内面素地が上方に隕達	備前Ⅳ期後半 宋町	15世紀	C-3	
23	陶器(鋸鉢)	備前焼鉢	/	14	6.6 色調:外表面:青、内面灰。焼成:良好。胎土:1mm砂粒多量含む。調整:内面ナデ? ヨコナデ、内面摩擦	備前Ⅳ期?	宋町 15世紀頃	E-3	
24	中世須恵器	棒鉢	/	/	2.9 色調:褐灰。焼成:良好。胎土:灰。調整:外表面不明、内面はヨコナデ、5条の横目		中世	E-2	
25	陶器(鋸鉢)	備前焼鉢	28.6	17.8	10.9 色調:純一赤。焼成:良好。胎土:密、3mm以上砂粒微量含む。調整:内面ヨコナデ。内面摩擦? 7条以上横目	備前Ⅳ期後半 宋町	15世紀後半 D-4	E-5	
26	陶器(鋸鉢)	備前焼鉢	/	/	3.6 色調:暗青・青褐色。焼成:良好。胎土:1mm砂粒含む。調整:外表面ヨコナデ? 内面摩擦? 7条以上横目	備前Ⅳ期後半~中期	13世紀後半~14世紀 第七		

以下、①横田賢次郎氏・森田勉氏の「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一形式分類と編年を中心として」<sup>21</sup>及び、②上川秀夫氏の「14~16世紀の青磁碗の分類について」<sup>22</sup>を参考に述べる。



第35図 菅城遺跡 流れ込み遺物実測図 (1:3)

第35図 菅城遺跡流れ込み出土遺物観察表

番号	器種	口径 cm	底径 cm	残高 cm	測定		製作年代	調査区
					成形・胎土・色調・調整等	内面		
1	土師質土器 环	10.4	/	3.4	カワラケ	焼成：良好。胎土：密1mm以下砂粒混在。色調：純い灰。外面：2条の同様、内面：回転ナデ	中世	E-2
2	土師質土器 环	10.7	/	3.5	カワラケ	焼成：良好。胎土：密2mm以下砂粒混在。色調外面：純い灰。内面：灰。外輪中段1条織？。内面：回転ナデ	中世	F-6
3	土師質土器 楠	/	7	3.3	カワラケ	焼成：良好。胎土：密1mm以下砂粒混在。色調：純い灰。内面：回転ナデ。内面底部：指ナデ。底部：回転角切り底	中世	F-4
4	土師質土器 楠	/	2.4	1.8	カワラケ	焼成：良好。胎土：密2mm以下砂粒混在。色調：純い灰。内面：回転ナデ。内面底部：指ナデ。底部：回転角切り底	中世	F-4
5	土師質土器 环	6.1	/	1.6	カワラケ	焼成：良好。胎土：密2mm以下砂粒混在。色調：純い黄灰。内面：回転ナデ底部指ナデ。底部：回転角切り底	中世	E-2
6	中世須恵器 製	/	/	6.8	龜山窯系	外因：滑子叩き目。内因：青海波文。板山狀工具で横方向に削取った痕跡。内面：青海波文。板山狀工具で横方向に削取った痕跡。内面：純い黄灰。断面：純い黄灰。縫合～完形	D-4	
7	中世須恵器 製	/	/	4.6	龜山窯系	外因：滑子叩き目。内因：青海波文。内面：滑子叩き目。内面：青海波文。成形：不良。胎土：密1mm以下砂粒混在。色調：純い灰。断面：純い黄灰。縫合～完形	E-2	
8	中世須恵器 製	/	/	3.9	龜山窯系	外因：平行叩き目。内因：ナデ？。成形：不良。胎土：密1mm以下砂粒混在。色調外側：黒灰。内面：灰。断面：純い灰。縫合～完形		不明
9	中世須恵器 製	/	/	4.4	龜山窯系	外因：平行叩き目。内因：青海波文。成形：良。胎土：密2mm以下の砂粒混在。色調外側：黄灰。内面：灰。縫合～完形		C-5
10	中世須恵器 製	/	/	4.2	龜山窯系	外因：平行叩き目。内因：青海波文。成形：良。胎土：密2mm以下の砂粒混在。色調外側：黒灰。内面：灰。縫合～完形		D-4
11	銅鏡 北宋銘 大聖元寶	無背	無背	輸入鉄。あるいは(機鋸(造)銕)	残存状態：良好	直径：2.5cm 重さ：2.8g	北宋 天聖元年～9年(1023～1031)	E-4
12	銅鏡 北宋銘 光祐通寶	無背	無背	輸入鉄。あるいは(機鋸(造)銕)	残存状態：不良	直径：2.2cm 重さ：1.8g	北宋 元祐元年～8年(1086～1093)	E-3

遺物34-1・2は、口縁部の一部のみの出土であるが、特に1は下縁がはっきりしており器肉も厚く、胎土中に黒い細粒が認められることから、①白磁碗IV類に相当し、その時期は①II期（11世紀中葉から12世紀初頭）に対応すると思われるが、おむね12世紀前葉と考えられる。

遺物34-4は、②外面体部に片切彫りの鍋連弁文を持ち、釉色は澄青。②のB-1に相当し、13世紀中葉から14世紀初頭のもの。5は②外面体部に片切彫りにより幅の広い連弁を表現するが連弁の盛り上りのないもの、釉色は澄青。②B-1あるいはB-IIか。14世紀中葉から15世紀初頭と考えられ

る。6は②外側体部に線描蓮弁文を持つもので、ヘラ先による線描の連弁の山形の劍頭との単位にやや乱れが生じたもの、釉色は濃いオリーブ。②B-IVか。15世紀後葉から16世紀と考えられる。

また4・5は、①の龍泉窯系青磁、蓮弁文碗I-5に相当し、5は竪のないI-5-aに、4は竪のあるI-5-bに分類される。

遺物34-7・8は黒釉碗で、いわゆる天目茶碗。碗口縁部の一部(7)と底部(8)が出土した。7は試掘時に出土し本調査区外からのものであるが、8と同一個体の可能性も感じたためここにとりあげた。釉は厚いところで1mmには満たないものの、見込みと外面の釉垂れの部分が厚い。胎土密で素地の良いことも含め、中国製ではないかとの助言を頂いた<sup>37</sup>。天目台の出土はない。(図版16c.)

遺物34-9~12は、東播系中世須恵器で片口鉢の口縁部の一部である。10は焼成も良く、口縁端部外面は焼し銀であり、重ね焼痕がある。他のものにも重ね焼痕はあるが焼成は良くない。森川稔氏の「中世須恵器」<sup>38</sup>の編年概念表を参考にすれば、口縁端部の形からⅡ期からⅢ期第1段階の範疇に納まりそうである。12世紀中葉から13世紀後半。(図版16e.)

遺物34-13~16・19は、土釜(羽釜)である。19は(土鍋)の脚部であり、足付きのものは山口県に多くみられ、県内では高津川流域で出土があるとの御教授頂いた<sup>39</sup>。13の外面は焼し銀であり瓦質を呈し、焼成は遺物34-10と似ている。14~16・19は土師質のもので、外面全体に煤が付着している。

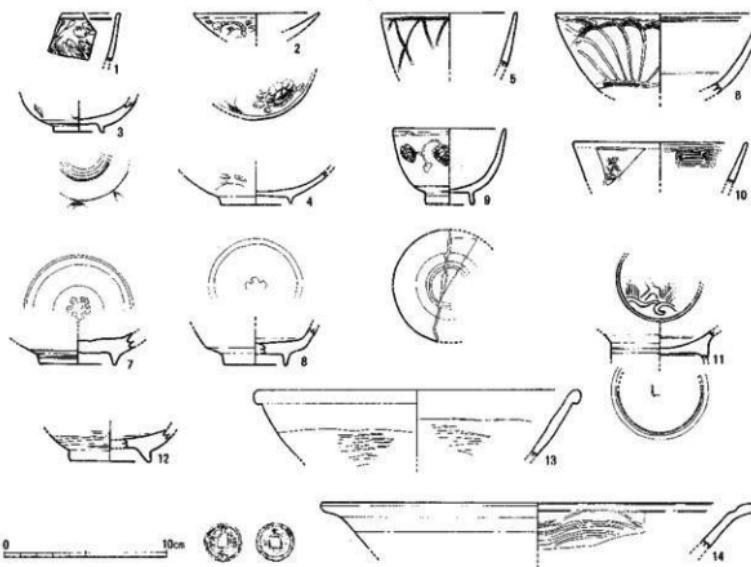
遺物34-18・20は土師質を呈する擂鉢であり、遺物34-24は中世須恵器で軟質の擂鉢である。產地・時期ともに不明である。

遺物34-17・21~23・25・26は備前焼の擂鉢である。以下、間壁忠彦氏の備前焼編年<sup>25</sup>を参考に述べる。まず17・26は青備前であり、条線があることからⅡ期後半からⅢ期(13世紀後半から14世紀)の可能性を考えている。21・22・25はⅣ期(15世紀)のもので、その口縁部の形態は21(前半)から22・25(後半)へと移行する。23は内面の磨耗が著しく、櫛がき条線をかすかに残すものである。

**第35図** 遺物35-1~5は土師質土器、いわゆるカワラケである。この土師質土器片は、本遺跡の中世・近世の遺物と比較して割合多い出土であるが、流れ込みで共伴性が薄いこともあります、時期(差)等よくわからず分類できなかった。ただ、輪高台を持つものではなく、すべて条切り痕のあるものである。(図版16d.) カワラケが主に饗宴や呪術的な使用物であれば、日常の食器として、図版16f.などの漆器(木製品)を多用していたと考えられる<sup>24</sup><sup>27</sup>。尚、吉城遺跡の近くには屋号「瓦毛屋」がある。(瓦を焼いた等、所以についての話は伝わっていない。)

遺物35-6~10は龜山系中世須恵器の腰片である。6・7は外面に格子叩き目、8~10は外面が平行叩き目のものであり、8以外の内面には青海波文の当て具痕が認められる。焼成は7は軟質で土師質に近く、6・8~10の表面は、両面共にほぼ焼し銀の瓦質を呈する。ただし、これらの土器は松江市大井町の大井古窯跡群で生産した可能性が指摘されるなど、龜山焼の類似品である可能性もある<sup>28</sup>。

遺物35-11・12は北宋銭。天聖元寶(天聖元年1023~1031年)と元祐通寶(元祐元年1086~1093年)が各1枚出土した。広島県福山市の中千軒町遺跡で、龜山焼の腰に納められた多量の北宋銭を中心とする中国輸入銭の埋銭(備蓄銭)の例を参考にすれば、室町時代頃に使用されたものであろう。近年の見解では模鋳銭も存在するとのことである。



第36図 菖城遺跡 耕盤最下部包含遺物実測図 (1:3)

第36図 耕盤である灰褐色土層(15層)の最下部から、江戸時代の肥前系陶磁器が出土している。右の表を参考に<sup>26</sup>、以下に述べる。

遺物36-1~4は、釉上彩の色絵(赤絵)である。

遺物36-2は濃赤・薄赤・緑で牡丹が描かれており、遺物36-4も図柄は不明だが、かなり具体的に描かれていたものである。

遺物36-1・3は2・4に対し抽象化の進んだ図柄に見える。遺物36-1は赤・青・黄を使用。色絵は天保4年(1647年)頃開始でIII期以降。

遺物36-5~10は釉下彩の染付で、いわゆる古伊万里である。

遺物36-5・6は、呉州による下絵付。遺物36-5は、外面に網文。

遺物36-7・8は、見込みに簡略化された丸弁花文様を持つ碗で、遺物36-8は外面が青緑釉のものである。IV期(18世紀)の後半と考えられる。(図版17a.)

遺物36-9は、呉州によるフタバアオイの下絵付である。この碗には焼締が施されていることから、V期(19世紀)と考えられる。(図版17b.)

遺物36-10は、呉州による下絵付である。内面口縁部に線描きの雷文、外面に白抜きによる図柄が描かれていたようである。(図版17a.)

遺物36-11は、呉州による下絵付である。詳細は不明だが、丁寧に具象的図柄が描かれ、高台内鉢款(底裏鉢)もあったと思われる。中国製陶磁器(青花)ではないかと御教授頂いている<sup>26</sup>。(図版17a.)

#### 肥前陶磁の変遷(大橋康二氏)

I 期	(1580年~1600年代)
II 期	(1600年~1650年代)
III 期	(1650年~1690年代)
IV 期	(1690年~1780年代)
V 期	(1780年~1860年代)

第36図 菅城遺跡耕盤最下部包含遺物観察表

36号	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	備考		製作地	時期	調査区	
						釉色(色名)	文様・使用痕等				
1	磁器	碗	/	/	/	3	釉上彩 赤絵(色絵)	外縁:赤・青・黄。内面:赤の上絵付	肥前系	18~19世紀	A-4
2	磁器	碗	8	/	/	1.5	釉上彩 赤絵(色絵)	口縁:赤。外面:赤・緑で牡丹の上絵付	肥前系	18~19世紀	D-3
3	磁器	碗	/	3	/	2.1	釉上彩 赤絵(色絵)	外縁:赤・緑で窓の上絵付。	肥前系	18~19世紀	B-1
4	磁器	碗	/	4.5	/	2	釉上彩 赤絵(色絵)	外縁:赤・緑の上絵付。外面にカセ(減化)	肥前系	18~19世紀	C-6
5	磁器	碗	8.4	/	/	3.4	釉下彩 釉裏青(染付)	外縁:青で櫻文の下絵付	肥前系	18~19世紀	G-7
6	磁器	碗	13	/	/	5	釉下彩 釉裏青(染付)	外縁:青の下絵付+青の上絵付	肥前系	18~19世紀	不明
7	磁器	碗	/	4.8	/	2	釉下彩 釉裏青(染付)	見込:簡略化された五弁花文(コンニャク印判)、重ね焼の痕跡	肥前系	18世紀	B-2
8	磁器	碗	/	4	/	2.5	釉下彩 釉裏青(染付)	外縁:青磁輪。見込:簡略化された五弁花文(コンニャク印判)	肥前系	18世紀	F-4
9	磁器	碗	7	/	4.8	/	釉下彩 釉裏青(染付)	外縁:青でフタバアオイの下絵付。瓶頸(船ガラス)	肥前系	19世紀	B-3
10	磁器	碗	11	/	/	2.5	釉下彩 釉裏青(染付)	外縁:白抜き。内面:口縁部に唐文(新羅)の下絵付	肥前系	18~19世紀	不明
11	磁器	/	/	6	/	1.7	釉下彩 釉裏青(花青)	外縁:青。見込:具象的模様下絵付。高台内:方形枠	中国製(青化?)	17~18世紀?	E-4
12	陶器	碗	/	5.2	/	2	釉下彩 灰赤色の素地に、両面白泥の刷毛目後、褐輪。削り出し高台		肥前系	18世紀頃?	E-2
13	陶器	皿	20	/	/	4.2	釉下彩 鈍い桜色の素地に、両面白泥の刷毛目後、褐輪		肥前系	18世紀頃?	C-2
14	陶器	皿	26.7	/	/	2.8	釉下彩 灰赤色の素地に、両面白泥の刷毛目後、褐輪		肥前系	18世紀頃?	B-3
15	倒錠	一文銭	寛永通寶	背に文・通の頭がコ	寛文八年(1668年)製、又はそれ以後の新鋳通寶	直径:2.5cm 重さ:3.2g 江戸?		1668年?以降	B-4		

遺物36-12・13・14は、椀及び皿と思われるもので、灰赤色の素地に白泥の回転刷毛目を施した後、褐輪をかけたもの。現川焼風のこれらの焼物は、IV期に対応すると考えられる。

遺物36-15は寛永通寶であり、背に文・通の頭がコの字になっている。寛文8年(1668年)以降の、新寛永と呼ばれるものである。肥前陶磁の変遷でIII期以降となる。

**結②** その他、報告できなかったものとして、(第4図)調査区中央、D-4・C-4区の、ピット群がある。S I 0 2で少し触れたが、これらは間違いなくS I 0 2埋没以降に掘り込まれたものである。平成5年の試掘調査でも、W-H-2(D-4区内)の重複するP 2・3から須恵器、土師器の細片と、桃又は梅の種子を1個半分確認していることから**I**、当初ピット群は、須恵器片から他の遺構同様古墳時代後期のものを想像した。しかし隣接する他のピットには、底部に糸切り痕のある土師質土器を出土するものもあり、単純にピット群の共伴性を見いだすこと、つまり時代別に分けることができなかった。結局、調査員の未熟さと調査期間の問題によりピットの断面図がとれず、観察不足のため、柱の並びが判別できなかった。このことは貴重な羽須美村史の情報を活かすことができなかったこととして責任を感じる。

## 第5章 調査の成果と課題

羽須美村の埋蔵文化財調査は、昭和46年（1971年）に当時阿須那中学校教諭であった横山純夫氏が生徒と共に野伏原古墳の石室を清掃・実測された例<sup>24</sup>を代表とし、その後も近隣町村の吉川正氏や振井久之氏の指導のもと行われてきた。平成7年（1995年）初めて羽須美村職員が本調査を行った。

菅城遺跡発掘調査の最大の成果は、縦型石匙から焼継の施された染付碗まで出土したことによって、これまでわかつていなかった戸河内袖ノ木（羽須美村）が、間違いなく縄文時代から継々と受継がれてきた歴史の上に存在し、今を迎えているという基本的事実の判明にある。

遺構・遺物の詳細は、第4章での報告どおりであるので、本章では大まかな事項を述べる。

遺跡名となった小字「菅城」の所在は、調査区において正確にはG-6・7付近である。昔からこの場所は他所の水が渴ても水が湧く所で、牛に水をやるために遠くからでも来ていたという。調査の結果、実際に旧谷川が集まっており、地下水の路として機能していたことが判明した。

また、本遺跡の発端となった昭和47年（1972年）出土の30-1は、調査区G-6に対応する位置で暗渠排水用の土管を埋めるため掘削した折出土したことであったが、今回S R 03から同一個体が出土し23年ぶりに接合された。

造構は、竪穴住居跡として弥生時代後期を2棟、古墳時代後期を1棟。古墳時代後期の掘立柱建物を2棟、土杭を1確認した。

建物跡の確認も本村では初めてである。SB01の周溝を、恐らく水害の経験から、改良のために切り直していることに、素朴に感動したのを思い出す。今後の調査で村内外の事例と比較し検討してみたい。遺物についても、黒曜石・28-3・33-1・34-4・34-10・36-9等々、戸河内袖ノ木の先祖が、各時代により様々な地域の

### 時代別の主な遺構・遺物

縄文		縦型石匙（安山岩） 黒曜石（鷹岐産であろう）
弥生	S101~02・(SR01~02)	中期前葉の甕 中期中葉の広口甕 中期後葉の甕（塙町式） 後期の甕や鼓形器台 等
古墳	SI03・SB01~02・SK01	中期の須恵器（櫛型甕） 後期の〃（蓋坏・甕）
奈良平安	(SR03?)	須恵器（平瓶・坏） 等
中世		土師質土器
平安末 ～室町		土釜・足付き土釜 中国陶磁器（白磁・青磁等） 中世須恵器（東播系・龜山系） 燐器（備前播鉢）
近世15 ・16c		北宋銭（天聖元寶・元祐通寶） 漆器・炉盤（鉢） 等
江戸		肥前系陶磁器・寛永通寶 等

## 第5章 調査の成果と課題

影響を受け生活していたことを、学びながら改めて実感した。

今後、横山純夫氏の業績や保管されている遺物との検討及び、それらの活用をはかっていきたい。

また遺跡の南、戸河内川を隔てた対岸の尾根は、「古墳が在りそうな所」と勘言<sup>⑤</sup>を頃いていたが、調査中偶然その尾根の木が伐採され円墳を2基発見することとなった(第1図⑤)。1基は径約12mであった。踏査のみでありそれ以上は不明であるが、菅城遺跡とどう対応するのか興味が持たれる。

中世の事柄として、菅城遺跡から北方へ直線距離約1.9kmの所に鷺影城(高橋氏)<sup>⑥</sup>跡(第1図④)があり、城跡のある山頂は現在、大字阿須郡大庭<sup>⑦</sup>・大字戸河内の境界となっている。

鷺影城は、正平年間(1346年~1370年)初代高橋九郎左衛門師光(英光)により築造され、大永・亨禄年間には高橋弾正盛光の居城であったと伝わり、軍原の言伝えによれば享禄三年(1530年)毛利元就に討たれ、高橋氏は滅亡したとされる。その後もなく毛利元就四奉行の一員、口羽(志路)刑部大輔下野守通良が口羽の地に配され、矢羽城跡を改修し琵琶甲城を居城とするのである[2][3]。

鷺影城跡には、30年前TV塔が建てられた際、掘削した断面に甕が三つに切られる格好で出土し、その中にカワラケが詰まっていたという話を聞いた[4]。地鎮具と想像する([4]の図版5と同様か)。

大庭には小字「殿屋敷」があり[5]、また寺院(庵)名(正満寺・西念寺・高正寺・福淨寺・法堂庵)を多く残す地である。

一方戸河内では、上橋<sup>⑧</sup>を思わせる屋号「土橋」があり、裏山の谷の小字「土橋」からは中世の可能性を持つ鉄滓を表探し(第1図②)、その家の前、現在畑となっている所には屋敷を思わせる石垣がある。また、この家は庄屋であったといわれており、大庭と比べて城との比高差の少ないこの地に「殿様が来られていた」という言伝えも聞かれる。この「戸河内」という地名は、高地・耕地さらに川(源流)に由来する語源も考えられるが[6]、「殿垣内」であるとすれば、在地領主(殿)の直當地であったことを意味する[7]とも考えられる。その他、柿ノ木地区には「御藏地・バンバ(馬場<sup>⑨</sup>・判場?)・瓦毛屋・鎧物屋・ジュズ屋・御堂ノ前・石堂」等々の地名が残っており併せて興味深い。

また発掘現場上方の尾根に五輪塔の一部(風・空)が2個体程あり(第1図③)、土地所有者が野武士の墓として守られている。

中世の文献等について、第2章で『鳥根県の地名』[8]から、興味深い資料を引用させて頂いた。

以上、菅城遺跡の調査と、関連する情報から見えてくるものは、中世には大庭に上居的要素を、そして戸河内柿ノ木周辺では、耕作による生活だけではなく、在地領主を担う製鉄関係等の職人達を含む人々が活躍し賑わっていたと考えられる。正誤を含め今後の調査に期待する。

今回の発掘を通して、作業員を含め地元の方々と接するなかで、多くの昔話を聞くことができた。当然、証拠のあるものだけではないが、遺跡と関連し興味深いものが多く、調査の賜と感謝している。

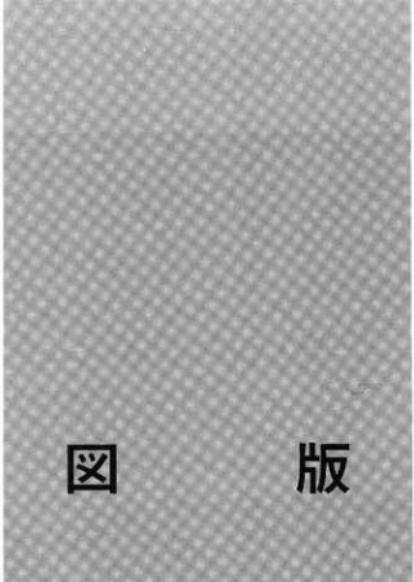
尚、本書で図化できなかった遺物も多く、また遺物写真も実測図と対応するよう、今後の検討材料として宿題としたい。

人は時代背景によって実際に様々なものを産み出すが、そこから不变・普遍性を感じ取ることが大切と思う。調査(本書)の内容はご覧のとおり多くの問題を抱えているが、羽須美村の礎となっている先人の力を、自らの力として頂ければと願うものである。

## 註（引用、参考文献・助言、指導内容）

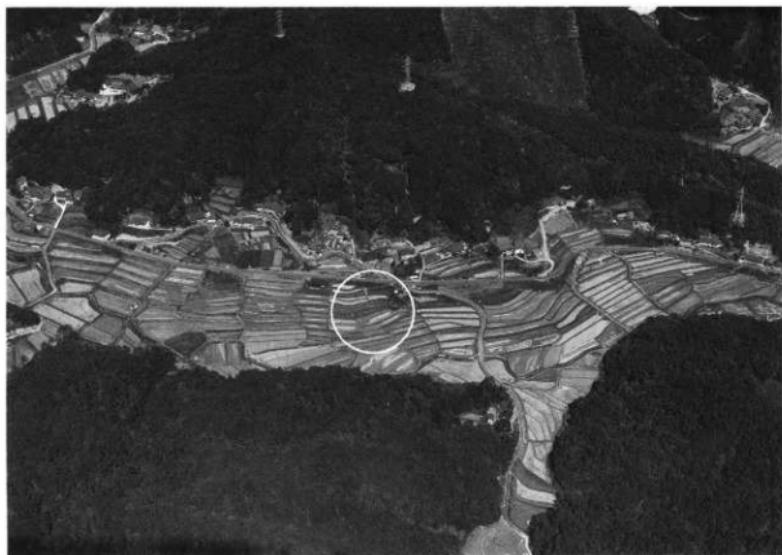
- ①-吉川正 「戸河内袖ノ木 菅原道跡試掘調査の概要」 羽須美村教育委員会 1993年
- ②-羽須美村誌編集委員会 「羽須美村志上・下巻」 1987年・1988年
- ③-山本清 監修 日本歴史地名体系33 「島根県の地名」 平凡社 1995年
- ④-吾郷和宏 「江の川中流域における横穴石室の様相」 島根県考古学会誌第8集 1991年
- ⑤-水口晶朗氏、吉川正氏に助言を頂いた。
- ⑥- 谷川健一 著 「民俗・地名そして日本」 同成社 1989年
- ⑦-瑞穂町郷土資料館に内1点保管されている。
- ⑧-中世土器研究会 編 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社 1995年
- ⑨-千田嘉博・小島道裕・前川要 著 「城館ハンドブック」 新人物往来社 1993年
- ⑩-木村健次 著 「広島県北部の地名」 青文社 1992年
- ⑪-羽須美村教育委員会・羽須美村文化財審議委員会 「羽須美の文化財」 1992年
- ⑫-水野清一・小林行雄 編 「図解 考古学辞典」 東京創元社 1994年(17版)
- ⑬-正岡聰夫・松木岩雄 編 「弥生土器の様式と編年 山陽山陰編」 木耳社 1992年
- ⑭-工楽善通 編 「古代史復元5 弥生人の造形」 講談社 1993年(4刷)
- ⑮-中村浩 著 「研究入門 須恵器」 柏書房 1990年
- ⑯-中村浩 著 「須恵器集成図録 第一巻 近畿編I」 雄山閣出版 1995年
- ⑰-大谷晃二 「山陰地域の須恵器の編年と地域色」 島根考古学会誌 第11集 1994年
- ⑱-白石太一郎 編 「古代史復元7 古墳時代の工芸」 講談社 1994年(4刷)
- ⑲-松江考古学講話会 編集 「松江考古 第8号」 1992年
- ⑳-日本貿易陶磁器研究会 「貿易 陶磁研究 No.2」 1982年
- ㉑-横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について 型式分類と編年を中心として」 九州歴史資料館 研究論集4 1978年
- ㉒-長谷部楽爾 今井敦 中国の陶磁12 「日本出土の中国陶磁」 平凡社 1995年
- ㉓-平成三年度春の企画展 「瀬戸内の中国陶磁」 広島県立博物館 1991年
- ㉔-松下正司 編 「よみがえる中世8埋もれた港町・草戸千軒・鞆・尾道」 平凡社 1994年
- ㉕-間壁忠彦 著 考古学ライブラリー60 「備前焼」 ニューサイエンス社 1991年
- ㉖-大橋康二 著 考古学ライブラリー55 「肥前陶磁」 ニューサイエンス社 1993年
- ㉗-欠部良明 編 「やきものの鑑賞基礎知識」 至文堂 1993年
- ㉘-野村泰三 著 「陶磁用語辞典」 カラーブックス432 保育社 1978年
- ㉙-編集人 諸角裕 「季刊 陶磁郎 1~4」 双葉社 1995年
- ㉚-矢部良明 著 「日本のやきもの史入門」 とんぼの本 新潮社 1992年
- ㉛-芸術新潮編集部 著 「やきもの鑑定入門」 とんぼの本 新潮社 1983年
- ㉜-出川直樹 著 「やきもの蒐集入門」 とんぼの本 新潮社 1990年
- ㉝-村山武 著 「窯別 日本のやきもの」 淡交社 1994年
- ㉞-矢部倉吉 著 「古銭と紙幣 収集と鑑賞」 金剛社 1992年(改訂版)
- ㉟-日本貨幣専門協同組合 「日本貨幣カタログ」 1995年
- ㉟-北九州市立考古博物館 「北九州の中華陶磁-出土品にみる古代の日中交流-」 1988年
- ㉞-西尾克己氏の教授による。
- ㉙-森岡弘典氏・廣江耕史氏の教授による。
- ㉙-吉川正氏の教授による。





#### 凡例

- 
- ①図版中の出土遺物●▲—▲●は、挿  
図中の第●▲図▲●に対応する。
  - ②図版中の西→は、被写体を西側から  
撮影したという意味。
-



a. 菅城遺跡 遠景 1989年 南→



b. 菅城遺跡 発掘調査前 全景 南→





a. SB01-SI01

SK01 西→



b. SB01 周溝

土層堆積狀況 東→



c. SB01 周溝

〔新〕遺物出土狀況 東→

营城遗迹



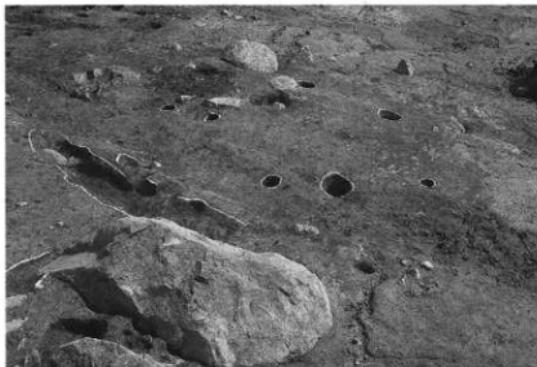
a. SI02 南西→



b. SI02 壁沟内  
遗物9-2 出土状况



c. SI02 炉跡  
遗物9-1 出土状况 東→



a. SI03 北西→



b. SI03 壁溝內  
遺物12-1 出土狀況 東→



c. SI03 壁溝內  
炭化物出土狀況







a. SK01 遺物出土狀況

東→



b. SX01

東南→



c. SX01 土層検出状況

東南→

圖版9



b. 旧谷川跡 北→

舊城遺跡



a. 旧谷川跡 南→